

フォーラム 2002

英語力を問う

主催 英米文化学会

平成14年3月9日開催

協力 文教大学附属中・高等学校

目 次

ご挨拶

会長 理事長

英米文化学会フォーラム2002開催にあたって

文教大学附属中・高校長

| 項 目 | 3月9日日程 | ページ |
|--|-------------------|-----|
| 基調講演概要 | 10:30-11:30 | 1 |
| パネルディスカッション | 13:00-15:00 | 5 |
| ワークショップ | 15:30-17:00 | 31 |
| 1) 英語検定教科書を問う： オーラル・コミュニケーションを中心に | | 31 |
| 2) 高校生の英語力は低下しているか | | 44 |

ご挨拶

ここ数年来「学力の低下」が教育界で問題とされている。現在教育現場では、この問題に対する対策が徐々に取りられているが、いまだに十分な効果が現れていない。一部の大学においても学力別編成によって、学生の英語力に見合った教育が始められている。しかし、果たしてそれだけで効果があがるか、現状では甚だ疑問である。

そこで、英米文化学会では、斯界に先駆けて、この問題を取り上げて、英語力そのものを問い直すべく、「フォーラム2002：英語力を問う」実行委員会を立ち上げ、平成13年の初頭から、精力的に活動をしてきたものである。当資料集は、フォーラムの成果の一部として広く問題を提起するものとしてもご覧いただけるものと信じている。このフォーラムが、教育界に一石を投じるものとなれば幸いである。

英米文化学会会長
高取 清

学生の学力低下の低下が問題になり、様々な議論がおこなわれ、また多くの本が出版されております。しかしこの問題のいわば火付け役となったのが理系の人たちであったためか、科学教育や算数・数学に関する議論と、文部科学省の提案する「ゆとり」教育に関するものがほとんどで、英語の学力低下に関するものは余り見あたらないようです。

英語教育については、ここ数十年の間に多種多様な議論がおこなわれ、ほぼ出尽くした感があります。けれどもそれらあまたの議論のなかで、学生達の英語力低下の問題がまともに議論されたことはほとんどなかったのではないかと思います。今後、英語教育に携わる者ばかりでなく、各界から様々な指摘や提案がなされることと思われまます。この資料集が、現状を正しく把握し、将来の英語力の向上に向けての方向づけの一助となれば幸いです。

末尾となりましたが、当日の会場を快くお貸し下さいました文教大学付属中・高等学校の関係者ならびに、本資料に引用させていただいたデータなどの使用を快くご承認くださいました、英語検定協会、学校法人河合塾ならびに財団法人国際コミュニケーションズ協会に深く感謝いたします。

フォーラム2002実行委員長
小野 昌
(英米文化学会理事長)

英米文化学会フォーラム2002開催にあたって

この度、本校を会場に英米文化学会主催による「フォーラム2002：英語力を問う」が開催されることになり心よりお慶び申し上げます。

最近、学力の低下が話題となる一方で、新学習指導要領のスタートを控え教育の現場は多くの問題を抱えています。

このような折、貴学会が開かれる事は意義があり、多くの成果を挙げ現場の教育に反映されることを期待しております。

文教大学付属中・高校長
福田 豊穂

話させるだけでは話せない —朗読と変身劇で豊かな英語入力を—

南山短期大学

近江 誠

英語は一つである。話す英語と書く英語の二種類があるわけではない。いわゆるリーディングの対象と思われる通常の文章—小説、詩、劇、童話、民話、寓話、随筆、日記、報道記事、映画シナリオ、その他あらゆる活字媒体の英語は、すべて背後に語り手がいるトークである。同様、会話英語と受験英語という区別はない。普通の文章——例えば入試の英文解釈の文章などは珠玉のトークである。相手の声が聞こえないだけのことで片側の人間の語りである。大学レベルにおいては購読、作品購読の文章は全てトークである。



近年は優れた語学素材は会話であるかのように中学生のリーダーは対話文全盛である。これは会話ができるようになるためには会話教材でなければならないという極めてアマチュア的な短絡発想である。目的とそれを達成する訓練とは違う。

モノログを通してこそ、コミュニケーション目的達成のための書き手 (=語り手) のカラクリを学び取る事ができ、自分自身の英語思考回路をつくりあげていくことができる。問題は、具体的にどうしたらいいかである。

音読や朗読の効用が認められてきているのは喜ばしい。しかし、多くは英語教育畑以外の人からの勤と経験に依るものである。逆にいえばそれだけ音読や朗読は従来の言語学やEFLではまともに取り扱われてこなかったという証拠でもある。音読、朗読が目的でなく手段として真の教育的効果を発するためには、古代ギリシャ、ローマに端を発するスピーチ学からの伝統であるオーラル・インタープリテーション (=音声解釈表現) や演劇の言語観、ならびにその手法を取り入れることが必用である。ただ声に出すだけではない。声を出している自分は誰か、誰に話しているか、いつ、どこで、どういう目的で(情報伝達、説得、余興接待、弁解、脅迫、誉め殺し等々、どういう内容を、どのような話の組み立てで話しているのか、また、その時に体は何をしているかなどを意識して、原文の語り手に成り代わって話すように音読してこそ、次のような教育的な効果が期待できる。

まず、①表現者の立場で解釈学習をするから批判的味読能力が育つ、②理解して声出しをする過程で発音やイントネーションなどの音声技術が磨かれる、そして最も重要なこととして③原文の表現群がかたまりごと身につく英語的思考回路が形成され、それがスピーキング、ライティングに応用されて出てくること——などである。骨太な発信できる英語力を養う過程で受験突破能力もつく。

なお、上の教育効果を促進させるために、語りの視点を視覚化するリーダーズ・シアター(朗読劇)や演劇訓練からの応用である近江考案の視点転換練習、変身劇(Rhetorical transformation, Mode-conversion exercise)、の魅力などをデモ入りで紹介する。

オーラル・インタープリテーション(Oral Interpretation)とは、小説、戯曲(モノローグ、ダイアローグ)、詩、書簡文、新聞記事、広告文、評論、社説その他、いかなる文章をも、背後に語り手がいる「語り」(=sermo)として捉え、語り手に成り代わってその、知的、情緒的、審美的一体として意味を解釈したように朗読表現するスピーチ学習である。

OIは目的ではない。それを手段として使うことで以下の教育効果が期待できる。

- ① 深く読む(批判的味読)力を養う
- ② 音声表現を磨く(発声、発音、プロジェクション、共鳴、イントネーション、リズム、高低、強弱、遅速、間(ま)などを磨く)
- ③ 素材の表現を固まりとして自分の体内に入力することで自分自身のスピーキング、ライティングの能力を従来の英会話以上に高める(豊かな出力には豊かな入力が必要)
- ④ (英語教育目標以外に)カタルシスと癒しを達成し、対人関係能力を身に付ける

第一段階:「コミュニケーション7つのポイント」に従って意味を確認する

1. WHO is speaking? 音声身体表現との関係は?
2. TO WHOM is he speaking? 音声身体表現との関係は?
3. WHEN is he speaking? 音声身体表現との関係は?
4. WHERE is he speaking? 音声身体表現との関係は?
5. WHY is he speaking? 音声身体表現との関係は?
6. WHAT is he speaking? 音声身体表現との関係は?
7. HOW is he speaking? 音声身体表現との関係は?

第二段階: 解釈の総合としての朗読で素材の表現群を塊ごとに入力する

第三段階: 変身劇(Rhetorical Transformation、Mode-conversion)でその入力を強化する。

「7つのポイント」を任意に動かして話してみるシミュレーション

■ 中学リーダー1年用素材より

I get up at seven every morning.

I eat breakfast at seven thirty.

I come to school at eight.

I eat lunch at noon.

I usually go home at four thirty.

I eat dinner at seven.

I go to bed about ten thirty.

■ 受験参考書、入試英文解釈の英文より

Your mind, like your body, is a thing of which the powers are developed by effort. That is a principal use, as I see it, in hard work in studies. A good part of what you learn may not be permanently retained, but your mind is a better and more powerful instrument because you have learned it. Knowledge is power, but still more the faculty of acquiring and using knowledge is power. If you have a trained and powerful mind, you are bound to have

stored it with something but its value is more in what it can do, what it can grasp and use than in what it contains. (東大等)

■ 詩より

'T was the night before Christmas
when all through the house
Not a creature was stirring,—not even a mouse;
The stockings were hung by the chimney with care
In hopes that St. Nicholas soon would be there.
The children were nestled all snug in their beds,
While visions of sugar-plums danced in their heads;
And mama in her ' kerchief, and I in my cap,

Had just settled down for a long winter' s nap,
When out on the lawn there arose such a clatter,
I sprang from the bed to see what was the matter.
Away to the window I flew like a flash,
Tore open the shutters and threw up the sash.
The moon on the breast of the new-fallen snow
Gave the luster of mid-day to objects below,
When, what to my wondering eyes should appear,
But a miniature sleigh, and eight tiny reindeer,

With a little old diver, so lively and quick,
I knew in a moment it must be St. Nick.
More rapid than eagles his courses they came,
And he whispered, and shouted, and called them by name:
“Now, DASHER! now, DANCER! now, PRANCER and VIXEN!
On, COMETY! On CUPID! On, DONNER and BLITZEN!
To the top of the porch! To the top of the wall!
Now dash away! dash away! dash away all!”

As dry leaves that before the wild hurricanes fly,
When they meet with an obstacle, mount to the sky,
So up to the house-top the courses they flew,
With the sleigh full of toys, and St.Nicholas too.
And then, in a twinkling, I heard on the roof
The prancing and pawing of each little hoof.
As I drew in my hand, and was turning around,
Down the chimney St. Nicholas came with a bound.
He was dressed all in fur, from his head to his foot,
And his clothes were all tarnished with ashes and soot;
A bundle of toys he had flung on his back,
And he looked like a peddler just opening his pack.

His eyes—how they twinkled! His dimples how merry!
His cheeks were like roses, his nose like a cherry!
His droll little mouth was drawn up like a bow,
And the beard of his chin was as white as the snow;
The stump of a pipe he held right in his teeth,
And the smoke it encircled his head like a wreath;

He had a broad face and a little round belly,
That shook, when he laughed like a bowlful of jelly.

He was chubby and plump, a right jolly old elf,
And I laughed when I saw him, in spite of myself;
A wink of his eye and a twist of his head,
Soon gave me to know I had nothing to dread;
He spoke not a word, but went straight to his work,
And filled all the stockings; then turned with a jerk,
And laying his finger aside of his nose,
And giving a nod, up the chimney he rose;
He sprang to his sleigh, to his team gave a whistle,
And away they flew like the down of a thistle.
But I heard him exclaim, ere he drove out of sight,
'HAPPY CHRISTMAS TO ALL AND TO ALL A GOOD NIGHT.'

写真①



写真②



パネルディスカッション

テーマ：『大学生の英語力低下』

パネリスト（五十音順）：

井上輝伸（都立立川高等学校外国語科）

大野秀樹（早稲田大学：語学教育研究所）

木村みどり（東京女子医科大学）

吉原令子（法政大学）

場所： 4階 視聴覚教室

時間： 13:00～15:00

司会者： 糸井江美（文教大学）

パネルディスカッションの趣旨

英語の分野に限らず「学力低下」の問題が広く語られるようになり、世間の関心を集めています。今回は「大学生の英語力低下」をテーマにパネリストから意見を伺い、フロアのみなさんと議論を進めていきますが、そのためにはまずこの問題を正しく認識する必要があります。例えば「大学生」ひとつ取り上げても、彼ら／彼女らを取り巻く英語環境は大きく変化し、今では誰もが洋楽や洋画を気楽に楽しんだり、英語圏からの情報をインターネットを使って簡単に入手することができます。しかし、翻訳産業の発達と共に海外からの情報は殆ど日本語で読めることも事実です。大学生自身の価値

観も多様になり、英語に対する興味や意欲も十人十色と言えます。「英語力」とは何かという問いに対しても答えは各人各様です。すでに受験が終わっている大学生にはどんな「英語力」が必要なのでしょう。多くの人が大学に進学する日本社会で、高度な「英語力」が必要とされる人たちはどのくらいいるのでしょうか。さまざまな疑問が浮かんできます。

さらに「低下」したかどうかの問いに対する反応も人によって違ってきます。最近の TOEFL や TOEIC あるいは英語検定試験のデータを過去のものと比較し、「低下」と結論づける新聞や雑誌の記事がある一方、データの分析、解釈の仕方によって一概に「低下した」とは言えないという意見も見受けられます。「低下」を論じるには誰の、どういう「英語力」について、いつからどの程度低下しているのか、共通認識を持つ必要があります。

また、「大学生の英語力低下」の問題を論じようとする、勢い余って大学側は「大学入学時点で基礎力がない」と中学、高校での英語教育を責め、中学、高校側は「入試英語」には難問、奇問が多く、大学では高校生の実力を無視した授業を行なっていると批判的になることがあります。どうやら高校教育と大学教育の間の深い溝を埋める役割を担っているのが予備校のようです。「予備」の域を飛び出した予備校は、大学入試問題作りや大学生の為の補習授業を請け負うなど、どんどん新しい事業を展開しています。この予備校の参入は天からの助けなのでしょうか、それとも警告なのでしょうか。

私たちはどのような英語力を備えた学生を社会に送り出せばいいのでしょうか。大学での2年間あるいは4年間、どのような英語教育をすればいいのでしょうか。中学、高校、大学へと英語教育のバトンタッチがうまくいけば、大学生の英語力低下をくい止めることができるかもしれません。そのためには英米文化学会にも大学、高校の教員だけでなく、中学校、小学校の教員、そして企業人の参加による幅広い人材、人脈が望まれます。

今回のパネルディスカッションでは、「大学生の英語力低下」に関わるさまざまな要因を考慮に入れながら積極的に意見交換をし、複雑な問題点を一つずつ明らかにしたいと思っています。そして、参加者全員が夢のある英語教育の将来像を心に描けるよう有意義な時になればと願っています。

(糸井江美)

パネリストの紹介

『大学生の英語力低下』をテーマとしたこのパネルディスカッションでは、大学で実際に英語教育に関わっている木村みどり先生、吉原令子先生、そして大学に生徒を送り出す立場の高校英語教諭、井上輝伸先生、また、語学教育研究所所属という研究者、大野秀樹さんの4名に登場していただき意見を伺います。

木村先生は、高校教諭の経験もあり、大学での教育歴も約10年になります。特にデベート、Critical Thinking などの教育に力を注がれており、今回は『大学生人口の増加に伴って、当然英語力レベルの低い大学生の増加が考えられる。また、高校、中学では、オーラル・コミュニケーションに多くの時間を割くようになったため、読む力が下がるのもやむをえないことであろう。しかし、聞く、話す能力は全体として伸びていると思われるし、ハイレベルの学生のレベルは下がっていないようだ。4技能の総合において考えれば、むしろ英語力にバランスが取れてきたとも言える』という内容を豊富なデータを用いてお話いただきます。

吉原先生の専門はアメリカ文化、女性論ですが、大学での英語教育の経験も長く(7年)、『(中・高英語)を3週間で復習してこんなに話せる英会話』(明日香出版、2001)、『日常会話に不自由しない程度の英語を1週間でマスターする本』(明日香出版、2001)、『英語はやっぱり前置詞だ!』

(明日香出版、2002)などの著書を出し、ますます積極的に英語教育に貢献なさっています。今回は、「『大学生の英語力低下』が叫ばれるようになって久しいが、『英語力の低下』とはそもそも何なのか。読解力がないことなのか、話せないことなのか、また、何のために英語を身につける必要があるのか、これらの問題点が明らかにされないまま英語教育の know how が先行した議論が多かったように思われる。今回のパネルディスカッションではこれらの問題点を一歩進めた議論と対策の一助になればと思う」という発表内容が期待されます。

「大学生の英語力低下は高校生、中学生の英語力低下が関係しているかもしれない」とおっしゃるのは長年(28年)高校で教鞭をとっていらっしゃる井上先生です。確かに日本人の英語力を語るときに「大学生の英語力低下」だけを取り上げては部分的で偏った考察となるでしょう。これからはますます小学生や幼児への早期英語教育が広がりつつある中、今回中学、高校の英語教育を通して「大学

生の英語力低下」を考えてみることは大変有意義なことだと思います。井上先生には「『大学生の英語力低下』←『高校生の英語力低下』←『中学生の英語力低下』という図式があるのかもしれない。公立高校で英語を教える立場から、生徒の置かれている現在の状況に触れつつ『低下』の要因を考えていきたい」という視点からの意見を伺います。

最後に語学教育研究所の助手という立場から大野さんに大学生の英語力低下について話していただきます。大野さんの研究領域は、コミュニケーション教育、ESP、ライティング、ディベートで、主に「英語によるディベートの史的研究」をテーマに研究を続けており、新進気鋭なる若手研究員ならではの意見が期待できます。「『大学生の英語力低下』といった言語論議の表現こそ、慎重に吟味する必要があります。その表現に隠れて見えない側面を論じる必要があるのではないのでしょうか。そしてこのような時代こそ、英語教師の力量が問われるのだと思います。」

「大学生の英語力低下」――その背景についての一考察

東京都立立川高等学校 井上輝伸

「大学生の英語力低下」について考えていた折、ある新聞記事が目にとまった。タイトルは、「高校の勉強 大学で『復習』。副題に「『学力不足』受け 私大で増加」「入学前に英語の宿題」とある。記事の中では、学力試験を受けずに人物本位で選考されたOA入試の合格者を対象に、「自己表現力」「英語表現力」の2冊のテキストとCDを与え、入学時までに勉強するように指示する大学の例（大正大）や、同じくOA入試の合格者に、課題図書3冊のほか、タイムやニューズウィークから抜粋した時事英語の翻訳を課す大学（成蹊大経済学部）などが紹介されている。前者の場合には、英語は毎日30分間、CDを聞きながら勉強し、年明けの2月には、電話で英会話の力をみるという。副題の後には「合格者に入学前から教育を始めたり、入学後に高校で学ぶ内容を再教育したりする大学が私立を中心に少しずつ増えている。大学の授業を理解できる学力が身につけていない学生が目立ってきたからだ。『分からないのは学生が悪い』と突き放すだけでは、問題は解決しないことに大学側は気づき始めている」とある。（資料1 2001.12.24<朝日>）

この記事を読んで、すぐに頭に浮かんだのは、学期末の成績会議で各教科の担当者が口々にもらしていた「学力の2極化」という表現であった。自分の担当する「英語」においても、数学、理科、社会、そしてすべての教科の基盤となるであろう「国語」においても同様である。公立の高校へは、良きにつけ悪きにつけ、中学段階で「輪切り」にされたある程度の学力を持った生徒が入学してくるのが通例である。いや、通例であった、というのがより正確かもしれない。現任校の場合、ここ5、6年に限ってみても、明らかに入学してくる生徒の「学力」（中学校からの内申書の成績）に変化が見られる。端的に言えば、5段階評定の「5」の数が、どの教科においても減ってきている。都立高校の中には、数年前までは、倍率もそこそこであった学校に定員割れが生じるなどの異変が生じつつある。2002年度から、小・中・高校で完全週休2日制が実施されることに伴って、文部科学省や教育委員会からは学校現場へさまざまな要望が出され、具体的な対応が求められてきているが、大学に学生を送り込んでいる高校での生徒の「学力の2極化」現象は深刻な問題の一つであるといえよう。

そこで、本稿では「大学生の英語力低下」というテーマに関して参考となるであろう高校・中学をめぐる社会的・教育的背景、現任校における2学年生徒の成績（評定平均値）と「国語力」の関係について触れてみたい。

◆「新指導要領」は「ゆとり」の重視

「新指導要領」では「ゆとり」を重視して公立中学の標準授業数が減らされるが、私立学校のほとんどは減らさないために、公立校との差がますます広まるという。民間の教育情報会社、森上教育研究所が、東京、埼玉、千葉、神奈川の私立中学計270校を対象に行ったアンケート調査によれば、私立の中学1年生から3年生の5教科の2002年度平均授業数は週22.6コマで、2001年度平均の23.2コマよりわずかに減ったものの、新指導要領の標準を週当たりで換算した14.9コマの1.5倍に当たるといえる。（資料2）私立が授業数を減らさない理由として、「学力低下を招く」などの批判を背景としている、と新聞（2001.1.4<朝日>）は報じているが、同紙面で、お茶の水大の宮原修氏は「私立中が5教科の授業数を多く確保するのは、新指導要領で学習内容が減ってもきちんと勉強させ、受験にも対応するというアピールを狙っているのだろう。、、、だが、学力は授業

数だけで決まるほど単純ではない。公立も選択科目の時間などに、発展的・補足的な学習や習熟度別授業をすることができる。新指導要領がめざす『生きる力』を養うためには、公立・私立ともに、授業の質がより重要になるはずだ」と述べている。確かに、授業数即学力でないことはその通りとしても、公立学校、特に高校では、完全週5日制の中で従来行ったきた年間行事をいかに消化するか、あるいは行事を減らして授業時間を確保するか、また一方で保護者から要望の強い、大学進学率をいかに高め、生徒の期待にも答えることができるか、にエネルギーの大半を使い、発展的学習や習熟度別授業を検討したり実施するのは難しい状況にあるのが現実である。現に、都立高校4校はすでに、進学指導重点校として、2002年度の土曜・日曜にOB・OGなどの協力の下、補習授業や受験指導を実施することを表明している。一方で「ゆとり」ある教育を標榜しつつ、現実的には教育現場から「ゆとり」をじわじわと失わせているのとの疑念を抱かせる教育施策が打ち出されていると感じるのは、筆者のみではないだろう。

文部科学省の中央教育審議会・教育制度分科会は2001年12月17日、幼児から成人段階まで教養教育を充実させるための答申案をまとめた。答申には、小中学校までに基礎学力を身につけさせた上で、高校で30冊の必読書を課す一方、教養教育の重点大学を育成するなどの具体的提言が盛り込まれている。この場合、必読書30冊は高校各校で決め、さまざまな価値観に触れさせる、とある。子供たち、特に高校生の年代の活字離れが話題となって久しいが、はたして冊数まで決めて答申する必要があるのだろうか。まさに、「ゆとり」とは矛盾する提言のように思われる。新聞の見出しには、「高校生に『30冊必読』指令」の文字が使われている。(2001.1.18<朝日>)

◆学力問題の根本

「学力」に関しては斉藤孝氏(明治大学助教授)が次のような興味深いことを述べているので、少しく引用させていただく。

「学力問題の根本は、学校で従来認められてきた学力と、社会を生き抜く力がずれてしまっていることにある。学校で、家庭で、つけるべき力は何かについて共通認識を持つことが、現在の緊急の課題である。文部科学省の提唱する『生きる力』では抽象的すぎるし、計算力や漢字力では概念として狭すぎる。私は『子どもに伝えたい<三つの力>』という著書で、『コメント力・段取り力・まねる盗む力』の<三つの力>を身につけるべき基礎力として提案した。私は、教育の基本は、からだづくりと日本語力だと考えている。」

「中学校の国語教科書から漱石、鴎外が消えたことが話題となったが、私は、小学生に名文を読ませるべきだと考えている。 <中略> 全体が十のものを十学ぶというよりは、百のものをまず与えるべきだと考える。国語はすべての教科の基本だ。小学校で、最高級の日本語を膨大にこなすことで、日本語力は格段に向上すると考える。」(2002.1.5<朝日>)

氏の意見に賛成である。特に、後半に関していえば、高校の英語の検定教科書では、しばしば難しい語彙や文法事項を避けるためか、オリジナルの英文とは似ても似つかぬ”ライト”が行われることがあるが、筆者は常々、できる限り原文(原作)のままをテキストに用いるべきだと考えている。必要に応じて教科書に載った英文の原文をプリントで生徒に配布するが、生徒自身からも、オリジナルの良さを感じる、との声を耳にすることがある。まさに、「最高級の英語を膨大にこなすことで、英語力は格段に向上する」ことは間違いないと思われる。

◆高校生に人気の2つの検定

財団法人日本英語検定協会による、第1回の英語検定試験が行われたのは、昭和38年(1963年)であった。当時は、1級、2級、3級の3つのグレードしかなかったが、年1回実施されたこの試験は人気を博し、計3万7千人余りが受験した。ちなみに、1級から3級までの、志願者数と合格者、合格率は、以下の通りである。

| | 志願者数 | 二次合格者 | 合格率 |
|----|-------|-------|-------|
| 1級 | 2489 | 485 | 19.5% |
| 2級 | 11653 | 4679 | 40.2% |
| 3級 | 23521 | 10095 | 42.9% |

そして、平成13年度(2001年)の第1回の志願者数と合格者、合格率は、以下の通りである。

| | 志願者数 | 一次合格者 | 二次合格者 | 合格率 |
|-----|---------|--------|--------|-------|
| 1級 | 15852 | 1179 | 871 | 56.8% |
| 準1級 | 58179 | 6997 | 5803 | 71.8% |
| 2級 | 191843 | 47280 | 41784 | 77.7% |
| 準2級 | 257148 | 103945 | 91749 | 83.2% |
| 3級 | 313084 | 167312 | 151684 | 90.4% |
| 4級 | 209023 | 150760 | | 74.9% |
| 5級 | 108010 | 85572 | | 83.8% |
| 合計 | 1150139 | 563045 | 291891 | |

文部省(現文部科学省)の認定がはずされたとはいえ、依然として志願者数は105万人余りと多い。米国の公共機構ETSが実施するTOEFLと並んで、日本の学生に人気がある検定試験といえよう。当然、中学生はもちろん、高校生、大学生の受験者も多く、「英検」受験人気という視点から見ると、大学生の英語力低下に結び付くものうかがえない。

もう一つ、学生に人気が出つつあるものに、日本漢字能力検定協会が主催する「漢字能力検定」がある。2001年度には志願者が170万人を越す勢いという。協会の設立は75年で、92年には国の認定資格となり、合格者を入試で優遇したり単位の認定に用いる大学や高校も増え、また企業も漢字の知識向上を求めるようになって、志願者が急増したようだ。ワープロ、電子辞書、読書離れなどで、若い世代の読み書き能力は低下の一途といわれる中で、検定志願者が急増しているのは、なんとも不思議ではあるが、検定をきっかけに漢字に親しむようになることは好ましい傾向といえよう。

◆魅力満載の中学英語「検定済教科書」

教科書会社をお願いして、最新の中学校の教科書を手に入れた。筆者の白黒時代のそれに比べ、教科書の版の大きさといい、多色刷りのページの美しさといい、まさに隔世の感があった。特に驚いたのは、3学年用の教科書である。1課 Let's Learn Braille では、教科書のページに実際の点字文字(とーきょー)が凹凸をつけて掲載されている。だいたい braille などという難しい語彙が中学の教科書に出ているとは夢にも思わなかった。まさに、目からうろこであった。さらに、「日本の風物」と題したページには、「次のものを説明する英文を書いて、発表しよう」とあり、「はっぴ」「はし置き」「絵馬」「ふろし

き」の写真が載っている。これはそのまま、“大学入試問題”として使えるのではないか！中学校の先生方は、こうした教材を使ってどのような授業を行っているのか、実際の様子を知りたいと思うが、残念ながらまだその機会がない。ほかに、項目のみ列挙すると、「ボランティア活動」「ヒット商品」「留守番電話と伝言」「落語家ビル・クラウリー」「道案内」「海外旅行」「優先席にすわってはだめ？」「知ってるタレント」などなど、タイトルだけでも生徒の興味・関心を引き起こすものばかりである。そして、「20世紀の偉人たち」では、ジョン・レノンはじめ、アンネ・フランク、手塚治、マザー・テレサ、レイチェル・カーソンなどが写真入りで紹介されている。

こうした魅力満載の教科書からは、少なくとも“英語嫌い”を生み出す要因は見いだせない。こうした素材を、文字どおり生かすも殺すも教師次第ということなのだろうか。

◆文字を読み取る力と英語力

教室で、さまざまな学力を持つ生徒と日々接していて痛感させられることの一つは、英文和訳などの際の、個々の生徒の日本語表現力の「差」である。一般的傾向としては、女子生徒よりも、男子生徒の表現力の乏しさがより目立つようだ。そこで、現任校の2学年生徒320名を対象に、2学期末の成績と「国語標準学力テスト」との結果を一覧表に作成し、成績全般および「英語II」「ライティング」と、文字を読み取る力としての「国語力」との関連性について分析を試みた。

成績不振者（評定平均2.6以下）と現代文を中心とした「国語II」の評定が「1」の生徒についてのデータが、資料3である。そして、成績優良者（評定平均4.3以上）および「国語II」の評定が「5」の生徒についてのデータが、資料4である。

資料3で目に付くのは、「5」「15」「20」「22」の生徒の評定と「国語標準学力テスト」「校内偏差値」とのズレであろう。そのほかの生徒に関しては、成績不振と「国語標準学力テスト」との数字はほぼ連動していると考えられる。つまり、「国語力」の不足が全教科および英語にとってマイナスの要因として作用していることがうかがえる。

資料4で目に付くのは、「1」（上段から3番目）「1」（上段から7番目）「18」（下段から6番目）「18」（下段から5番目）の生徒であろうか。それ以外の生徒については、評定平均値の高さと「国語標準学力テスト」との数値にさほどの違和感はないように思われる。「国語力」の力が全教科および英語の学習にとってプラスの要因として作用しているものと考えられる。

◆おわりに

「大学生の英語力低下」←「高校生の英語力低下」←「中学生の英語力低下」といった流れがもしもあると仮定すれば、高校で教鞭をとる一人として、なんとかこの流れを断ち切りたいと思う。しかし、3年間という限られた時間の中では、教師のみがあがいてみたところで所詮限界がある。語学習得は、その動機が何であれ、すぐれて主体的行為であるからである。そのために、少なくとも“英語嫌い人間”を作らない、をモットーに日々の授業に臨むことと、何よりも、私たち自身が“英語好き人間”の手本を示しながら、さまざまな英語情報をどんどん発信していくことが何よりも大切であると思う。そのため、これまで私自身積極的に“留学事業”や“語学研修旅行”にかかわってきたが、これからもこうした努力を続けていきたい。

高校の勉強 大学で「復習」

「学力不足」受け 私大で増加

合格者に入学前から教育を始めた、入学後に高校で学んだ内容を再教育したりする大学が私立を中心に少しずつ増えている。大学の授業を理解できる学力が身につけていない学生が目立ってきたからだ。「分からないのは学生が悪い」と突き放すだけでは、問題は解決しない。大学側が対応始めている。

入学前に英語の宿題 成蹊大

大正大学(東京都豊島区)では、学力試験をせず人物本位で選ぶAO入試の合格者に11月末、「自己表現力」「英語表現力」と題された2冊のテキストと、CD2枚が手渡された。

大学は、このテキストで入学までに勉強をするよう指示している。自己表現力では、「死・隣国移住」「イースラムの現在」など四つのテーマから一つ選んで、毎月1冊指定書を読み、小論文を合計3回書く。英語は毎日30分間、CDを聞きながら勉強する。2月には、電話で英会話の力をみるという。

高校側からみると、AO入試の評判は、「早々と合格して遊んでばかり。ほかの生徒に迷惑」と芳しくない。合格者も、学力試験を経ないことに負い目を感じる傾向がある。

「自己表現力」は、入学前に「AO入試導入と同時に入学準備教育を始めた。合格すれば3冊のもの」と全くやらないスルも年に数人いる。柏木正博・教務部長は「呼び出して『高校の後援がどうなってもいいの?』と説教するぞ、みんな始めますよ」と話す。

成蹊大経済学部(東京都武蔵野市)が昨年始めたAO入試の合格者も、学力試験を経ないことに負い目を感じる傾向がある。課題図書3冊のほか、目録新聞に専門家が寄稿する「経済教室」の要約、タイムやニュースウィークから抜粋した時事英語の翻訳を課す。来春からは入学直前にパソコンの講習会を開き、入学直後には数学で全員をクラス分けし、到達度の授業を用意する。初歩のクラスでは、中から高レベルを教えることもあるという。

数学など半年補習 龍谷大

大谷大学短期大学部(京都市)で12月上旬にあった「日本語表現」の授業。「お客様が申されたように、これは失礼な表現ですね。尊敬語ではなくて、謙譲語なんですから」

た。読み・書きは教授陣が教えるが、聞く・話すの3回分は外部講師だ。「与えられた問題を解くだけという教育しか受けてこなかったのではなにか。下手でもいかに自分を表現させたか。担当の荒井とみよ教授(近代文学)は話す。

理工系の私大入試では、理科は1科目が大抵。生物と化学しか教えない高校もあり、物理は中学卒業段階のままで合格が可能だ。

龍谷大経済学部(大津市)は昨年度、物理、化学など1科目が大抵。生物と化学しか教えない高校もあり、物理は中学卒業段階のままで合格が可能だ。

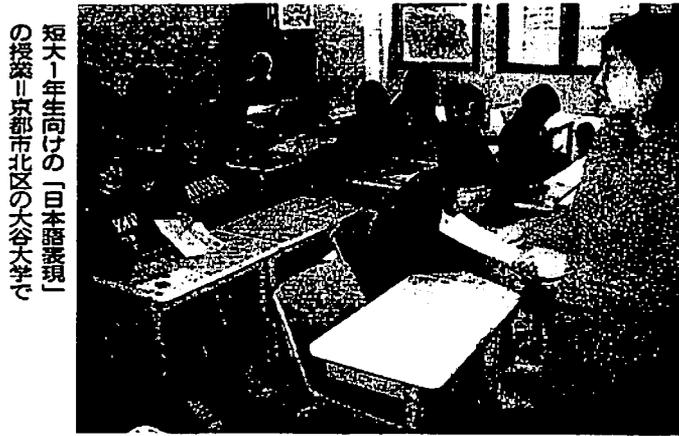
予備校下請けも代ゼミ

受験産業も補習授業に力を入れ始めている。代々木ゼミナールは今春、「大学補習事務局」を正式に発足させた。すでに約10校から注文を受けた。推薦入試やAO入

試の合格者向けに、中高レベルの数学や英語、物理などのテキストや問題集を売り、発送・採点を請け負う。NPO法人「日本技術者連盟」(東京都港区)

も、約6割の250人が受かった。正課の授業も出席を促し、ほぼ全員が最後まで受けた。教務主任の松本和一郎教授は「自分の実力に、内心不安を抱いているようだ。実力を公平に診断し、補習で努力を伸ばし、合格を評価すれば、やる気は引き出せる」と話す。

は、新入生がインターネットで自宅学習できる「基礎学力支援プログラム」を開発した。今秋、東京と大阪で開いた実演セミナーには、50を超える大学が参加した。東京の駿台予備学校では今春、大生向けの1つの講座を始めた。「物理入門」「線形代数へのアシスト」など、高校から大学へのつながりとなる内容だ。来年3月、「大学準備講座」として全国12会場に拡大する。



短大1年生向けの「日本語表現」の授業(京都市北区の大谷大学)

龍谷大経済学部(大津市)は昨年度、物理、

推薦入試やAO入

試の合格者向けに、中高

は、新入生がインターネットで自宅学習できる

(資料2)

首都圏中学の5教科授業数

「公私」の差拡大

「ゆとり新指導要領」の来年度

私立中学校の5教科の授業数は来年度、公立の1.5倍——。首都圏の私立中に国語、社会、数学、理科、英語の授業数を合わせた教育情報会社のアンケートで、こんな結果が出た。春からの新学習指導要領は「ゆとり」を重視し標準授業数を減らしたが、「学力低下を招く」などの批判を背景に、私立はほとんど減らさなかった。公立は原則として新指導要領通りの授業数にするため、現在1.2~1.3倍の差が広がっているといえる。

民間調査 私立が1.5倍

■1週間の授業数比較(来年度)

| 教科別(3学年平均) | 新指導要領 | |
|------------|-------|-----------|
| | 公立(倍) | 私立(倍) |
| 英語 | 3 | 5.7(1.9) |
| 数学 | 3 | 4.7(1.6) |
| 国語 | 3.3 | 4.9(1.5) |
| 社会 | 2.8 | 3.6(1.3) |
| 理科 | 2.8 | 3.6(1.3) |
| 学年別(5教科合計) | | |
| 3年 | 13.7 | 23(1.7) |
| 2年 | 15 | 22.5(1.5) |
| 1年 | 16 | 22.2(1.4) |

東京都、埼玉、千葉、神奈川県、東京都千代田区がアンケート。授業数については193校の回答をまとめた。私立の中1・中2の5教科の来年度平均授業数は週22.6コマで、今年マンネートでは、全学年で5教科別平均、学年別での授業数と新指導要領の比較は別表の通りだ。マンネートでは、全学年

合計の5教科の授業数を、来年度から増やす学校が37校(19.2%)あることもわかった。

豊島岡女子学園中(東京都豊島区)は来年度、数学の授業を中3で20%、中2で8.8%増やす。中3では新指導要領の標準の2倍になる。標準授業数が減る保健体育や家庭科の時間を充てるという。

受験宣伝よりも授業の質が重要
カシキラムに詳しい河原節・お茶の水女子大教授(教育方法)の話。私立中から教科の授業数を多く確保するのは、新指導要領

標準の学習内容が減っても、きつめに勉強させ、受験に有利な内容を教えるという面がある。だが、学力は標準の授業数だけでは保てない

種ではない。公立も選択教科の時間を削り、発展的・補充的な学習や商業講座授業をするところがある。新指導要領がある「生きた学力」を養うため、公立・私立ともに、授業の質がより重要になると見られる。

頭、中3の英語などを拡充する横浜女学院中(横浜市中区)は「学習内容が減っても大入試の状況が変わらなければいい。増やさない」と現状に合わない。各学年で週2時間ずつ5教科の授業が増え、全学年の合計は標準の1.8倍になる。

総合的な学習の時間の新設や完全週5日制に伴い、中学全学年の国語は20~25%、中2、中3の数学は25%減るなど、教科の授業数が削減された。学校判断で増減できるが、公立は原則的に指導要領の授業数に従う。私立は独自の5教科を増やしている学校が多い。

森上教育研究所の森上展安所長は「進学校を中心に、学力維持のために授業数を減らさない私立が多い。入学時に親に約束した授業数を減らせないという理由もある。5教科以外の授業を最低限に抑えることで、時間を確保している」と話す。

(資料3)

「国語II」評定「1」の生徒についてのデータ

| | m/f | 評定平均 | 国語II | 英語II | ライティング | 国語標準学力テスト | | | |
|----|-----|------|------|------|--------|-----------|-------|---------|-------|
| | | | | | | 学年順位 | 校内偏差値 | 前年順位 | 前年偏差値 |
| 1 | m | 3.1 | 1 | 3 | 3 | 208/316 | 44.9 | 308/318 | 28.1 |
| 2 | m | 2.9 | 1 | 2 | 2 | 219/316 | 44.0 | 174/318 | 49.2 |
| 3 | m | 2.8 | 1 | 3 | 2 | 116/316 | 53.6 | 311/318 | 23.9 |
| 3 | m | 2.8 | 1 | 2 | 3 | 186/316 | 47.5 | 143/318 | 51.3 |
| 5 | f | 2.7 | 1 | 3 | 5 | 192/316 | 46.6 | 143/318 | 51.3 |
| 6 | m | 2.6 | 1 | 2 | 2 | 296/316 | 34.4 | 258/318 | 40.7 |
| 7 | m | 2.5 | 1 | 3 | 2 | 200/316 | 45.7 | 91/318 | 34.4 |
| 7 | m | 2.5 | 1 | 3 | 2 | 271/316 | 37.9 | 143/318 | 51.3 |
| 7 | m | 2.5 | 1 | 2 | 2 | 219/316 | 44.0 | 201/318 | 47.1 |
| 10 | m | 2.4 | 1 | 2 | 2 | 116/316 | 53.6 | 143/318 | 51.3 |
| 10 | m | 2.4 | 1 | 3 | 2 | 116/316 | 53.6 | 143/318 | 51.3 |
| 12 | m | 2.3 | 1 | 3 | 1 | 176/316 | 48.3 | 43/318 | 59.7 |
| 12 | m | 2.3 | 1 | 2 | 1 | 不 受 験 | | | |
| 14 | m | 2.3 | 1 | 2 | 3 | 176/316 | 48.3 | 238/318 | 42.8 |
| 15 | m | 2.2 | 1 | 2 | 3 | 19/316 | 64.9 | 310/318 | 26.0 |
| 15 | m | 2.2 | 1 | 1 | 1 | 103/316 | 54.4 | 174/318 | 49.2 |
| 17 | m | 2.1 | 1 | 2 | 1 | 310/316 | 29.2 | 94/318 | 55.5 |
| 17 | m | 2.1 | 1 | 2 | 1 | 71/316 | 57.9 | 238/318 | 42.8 |
| 19 | m | 2.0 | 1 | 3 | 3 | 291/316 | 35.3 | 143/318 | 51.3 |
| 20 | m | 1.9 | 1 | 2 | 1 | 156/316 | 50.1 | 118/318 | 53.4 |
| 20 | f | 1.9 | 1 | 3 | 1 | 66/316 | 58.8 | 94/318 | 55.5 |
| 22 | m | 1.8 | 1 | 2 | 1 | 40/316 | 61.4 | 16/318 | 61.8 |
| 22 | m | 1.8 | 1 | 1 | 1 | 305/316 | 31.0 | 303/318 | 30.2 |
| 24 | m | 1.4 | 1 | 1 | 1 | 48/316 | 60.5 | 258/318 | 40.7 |

国語標準学力テスト：東京都高等学校国語教育研究会主催で、4月の新学期早々に実施されるもので、「学年順位」「校内偏差値」は平成13年度（受験者数8,636）、「前年」とあるのは平成12年度（受験者数15,403）の資料である。

成績優良者および「国語II」評定「5」の生徒についてのデータ（資料4）

| | m/f | 評定平均 | 国語II | 英語II | ライティング | 国語標準学力テスト | | | |
|----|-----|------|------|------|--------|-----------|-------|---------|-------|
| | | | | | | 学年順位 | 校内偏差値 | 前年順位 | 前年偏差値 |
| 1 | m | 4.8 | 5 | 5 | 5 | 2/316 | 72.7 | 7/318 | 63.9 |
| 1 | m | 4.8 | 5 | 5 | 5 | 55/316 | 59.7 | 118/318 | 53.4 |
| 1 | m | 4.8 | 5 | 5 | 5 | 232/316 | 43.1 | 118/318 | 53.4 |
| 1 | f | 4.8 | 5 | 5 | 5 | 25/316 | 64.0 | 16/318 | 61.8 |
| 1 | f | 4.8 | 5 | 5 | 5 | 90/316 | 56.2 | 7/318 | 63.9 |
| 1 | f | 4.8 | 5 | 5 | 5 | 192/316 | 46.6 | 16/318 | 61.8 |
| 1 | f | 4.8 | 5 | 5 | 5 | 208/316 | 44.9 | 258/318 | 40.7 |
| 1 | f | 4.8 | 5 | 5 | 5 | 81/316 | 57.0 | 238/318 | 42.8 |
| 9 | m | 4.7 | 5 | 5 | 5 | 15/316 | 65.7 | 258/318 | 40.7 |
| 9 | m | 4.7 | 5 | 5 | 5 | 34/316 | 62.3 | 16/318 | 61.8 |
| 9 | m | 4.7 | 5 | 4 | 5 | 116/316 | 53.6 | 238/318 | 42.8 |
| 12 | m | 4.6 | 4 | 5 | 5 | 30/316 | 63.1 | 71/318 | 57.6 |
| 12 | f | 4.6 | 4 | 5 | 5 | 137/316 | 51.8 | 43/318 | 59.7 |
| 12 | f | 4.6 | 5 | 5 | 5 | 15/316 | 65.7 | 258/318 | 40.7 |
| 12 | f | 4.6 | 5 | 4 | 5 | 40/316 | 61.4 | 174/318 | 49.2 |
| 16 | m | 4.5 | 5 | 4 | 5 | 116/316 | 53.6 | 258/318 | 40.7 |
| 16 | f | 4.5 | 5 | 5 | 4 | 5/316 | 69.2 | 43/318 | 59.7 |
| 18 | m | 4.4 | 5 | 4 | 4 | 55/316 | 59.7 | 94/318 | 55.5 |
| 18 | m | 4.4 | 5 | 4 | 5 | 103/316 | 54.4 | 43/318 | 59.7 |
| 18 | m | 4.4 | 4 | 4 | 5 | 55/316 | 59.7 | 71/318 | 57.6 |
| 18 | m | 4.4 | 4 | 4 | 4 | 48/316 | 60.5 | 71/318 | 57.6 |
| 18 | m | 4.4 | 5 | 4 | 4 | 241/316 | 42.3 | 201/318 | 47.1 |
| 18 | f | 4.4 | 5 | 5 | 5 | 259/316 | 39.7 | 286/318 | 39.5 |
| 18 | f | 4.4 | 5 | 4 | 4 | 15/316 | 65.7 | 1/318 | 68.1 |
| 18 | f | 4.4 | 5 | 5 | 5 | 219/316 | 44.0 | 143/318 | 51.3 |
| 18 | f | 4.4 | 5 | 5 | 5 | 7/316 | 68.3 | 16/318 | 61.8 |
| 18 | f | 4.4 | 4 | 5 | 5 | 296/316 | 34.4 | 71/318 | 57.6 |

成績優良者および「国語II」評定「5」の生徒についてのデータ（続き）

| | m/f | 評定平均 | 国語II | 英語II | ライティング | 国語標準学力テスト | | | |
|----|-----|------|------|------|--------|-----------|-------|---------|-------|
| | | | | | | 学年順位 | 校内偏差値 | 前年順位 | 前年偏差値 |
| 18 | f | 4.4 | 4 | 5 | 4 | 176/316 | 48.3 | 71/318 | 57.6 |
| 18 | f | 4.4 | 4 | 5 | 5 | 296/316 | 34.4 | 71/318 | 57.6 |
| 18 | f | 4.4 | 4 | 4 | 5 | 310/316 | 29.2 | 291/318 | 34.4 |
| 31 | m | 4.3 | 5 | 5 | 5 | 193/316 | 46.6 | 201/318 | 47.1 |
| 31 | m | 4.3 | 4 | 4 | 5 | 283/316 | 37.0 | 222/318 | 44.9 |
| 31 | m | 4.3 | 4 | 5 | 5 | 163/316 | 49.2 | 277/318 | 38.6 |
| 31 | f | 4.3 | 3 | 4 | 4 | 192/316 | 46.6 | 222/318 | 44.9 |
| 31 | f | 4.3 | 4 | 5 | 4 | 208/316 | 44.9 | 174/318 | 49.2 |
| 36 | f | 4.2 | 5 | 5 | 5 | 48/316 | 60.5 | 118/318 | 53.4 |
| 36 | f | 4.2 | 5 | 4 | 5 | 219/316 | 44.0 | 143/318 | 51.3 |
| 36 | f | 4.2 | 5 | 4 | 3 | 55/316 | 59.7 | 43/318 | 59.7 |
| 36 | f | 4.2 | 5 | 3 | 4 | 137/316 | 51.8 | 43/318 | 59.7 |
| 40 | m | 4.1 | 5 | 4 | 4 | 34/316 | 62.3 | 143/318 | 51.3 |
| 40 | f | 4.1 | 5 | 5 | 4 | 95/316 | 55.3 | 118/318 | 53.4 |
| 40 | f | 4.1 | 5 | 4 | 3 | 264/316 | 38.8 | 94/318 | 55.5 |
| 40 | f | 4.1 | 5 | 4 | 4 | 147/316 | 51.0 | 43/318 | 59.7 |
| 40 | f | 4.1 | 5 | 4 | 4 | 19/316 | 64.9 | 16/318 | 61.8 |
| 45 | f | 4.0 | 5 | 3 | 5 | 255/316 | 40.5 | 94/318 | 55.5 |
| 45 | f | 4.0 | 5 | 4 | 4 | 4/316 | 70.1 | 16/318 | 61.8 |
| 45 | f | 4.0 | 5 | 3 | 4 | 271/316 | 37.9 | 118/318 | 53.4 |
| 48 | m | 3.8 | 5 | 4 | 3 | 7/316 | 68.3 | 7/318 | 63.9 |
| 48 | f | 3.8 | 5 | 4 | 5 | 19/316 | 64.9 | 7/318 | 63.9 |
| 48 | f | 3.8 | 5 | 3 | 3 | 40/316 | 61.4 | 277/318 | 38.6 |
| 48 | f | 3.8 | 5 | 4 | 3 | 232/316 | 43.1 | 174/318 | 49.2 |
| 52 | f | 3.8 | 5 | 4 | 5 | 55/316 | 59.7 | 143/318 | 51.3 |
| 53 | f | 3.6 | 5 | 3 | 3 | 90/316 | 56.2 | 143/318 | 51.3 |
| 54 | f | 3.5 | 5 | 3 | 3 | 30/316 | 63.1 | 16/318 | 61.8 |

大学生の英語力低下（木村 みどり）

この資料は、今日の大学生の英語力の現状と今後克服していかなければならない問題点を知るための資料であり、大きく3つの項目に分かれている。I. 過去10年の英検結果から見た、大学生の英語力の変化を知るためのデータ、II. その他の資格試験（主に TOEIC）から大学生の英語力を推測するためのデータ、III. 大学の現場より、大学生の英語能力、授業態度、カリキュラムを、学生と教師両者の立場から見るデータ、である。

まず、図1は、学生の英語力を客観的に測る物差しとしての英検の妥当性を示すものである。図3～6は大学生を代表する英語力が英検準1級を中心に、1級、2級あたりまでにあること、図2、7、8は大学生人口の増加に反して、大学生英検志願者人口はむしろ減少状態にあること、しかし、合格者数はほぼ一定を保っていることを示す。

図9、10は、特に、英検ハイレベル(1級と準1級)受験者に焦点を当て、過去10年間における大学生と高校生との英語力の比較を見るものである。

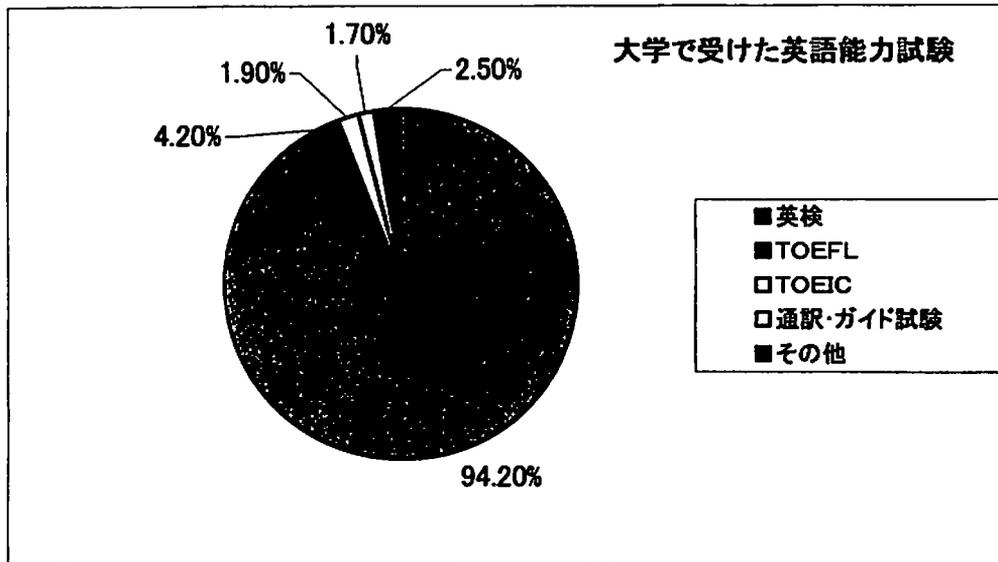
図11、12はTOEICのスコアより、ReadingとListeningの大学生の英語力を見る。図13は、アジアの他の国とのTOEFLスコアの伸びの違いと、資料1で、その原因の一つと考えられる理由を示す。

図14では、大学生が自分の英語能力をどのように評価しているか、そして、図15～18は、彼らが大学の授業にどのように取り組んだかを示す。図19～23では、大学での英語力に関係があると思われる要素を、3つの観点から見ている。

図19、20は、中学、高校の授業数との関連から、図21、22は、大学での英語教育について教師と学生の目標のずれを、図23では、語学学校と大学の授業の違いを探る。

I. 英検から見た大学生の英語力

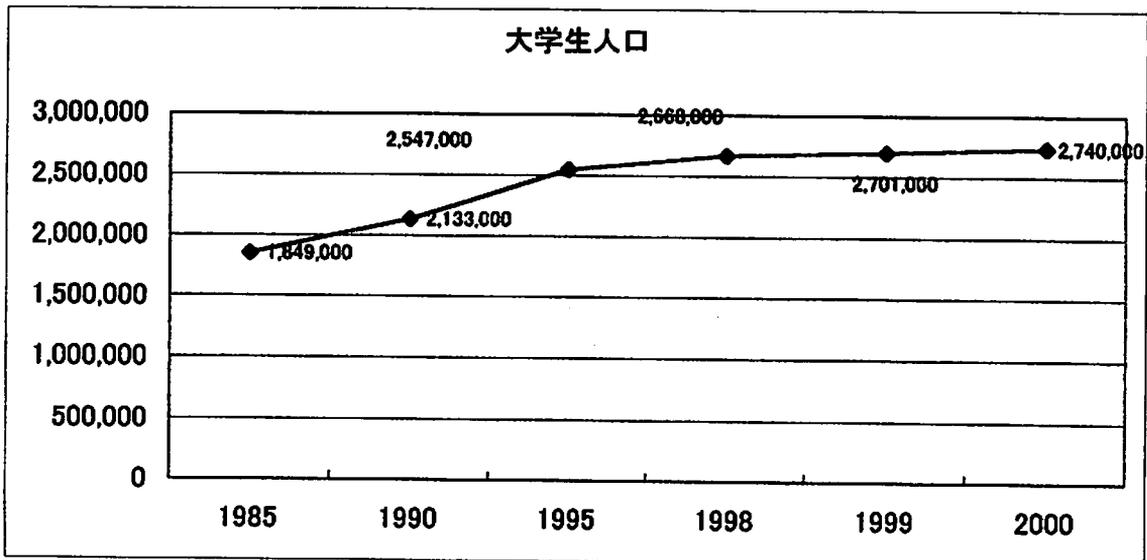
図1. 大学生が受ける英語能力試験



N = 3,264

(出典：研究成果報告書 (大学英語教育に関する実態と将来像の総合的研究 (II))
—学生の見方—1985年)

図2. 大学生人口の推移



(出典：人口白書)

図3. 学生の英検一級合格者

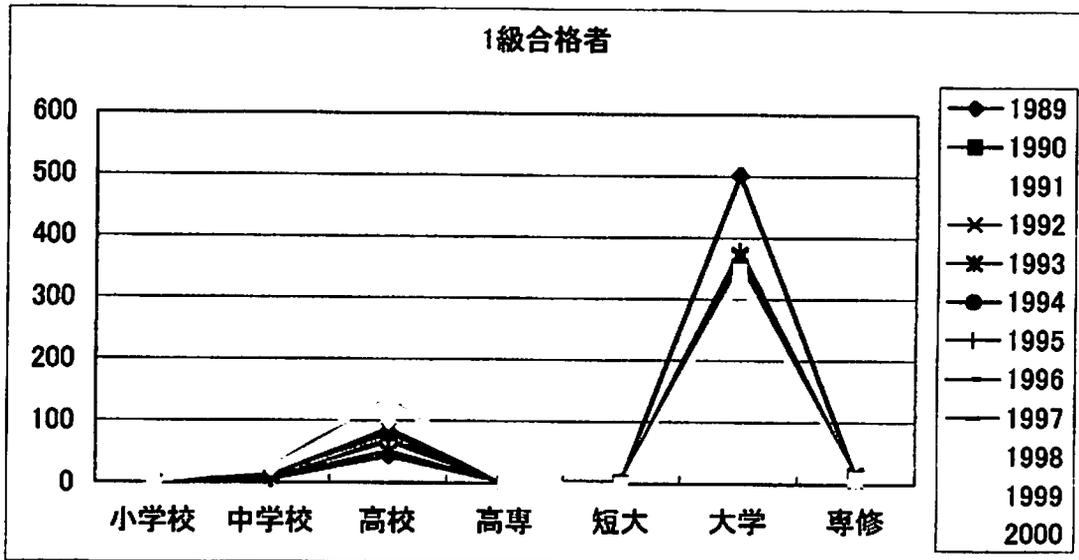


図4. 学生の英検準1級合格者

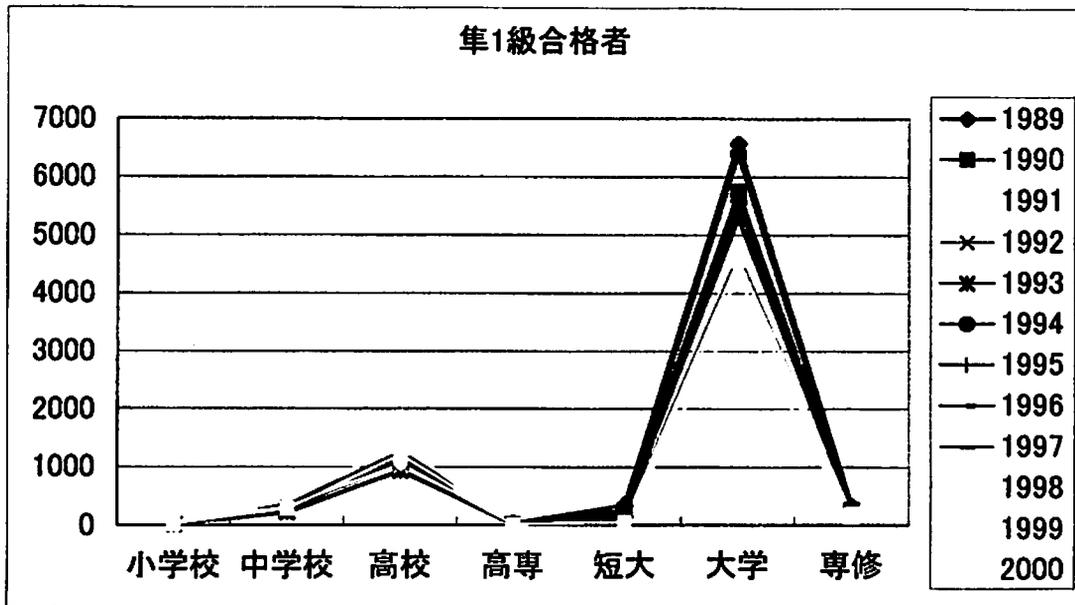


図5. 学生の2級合格者

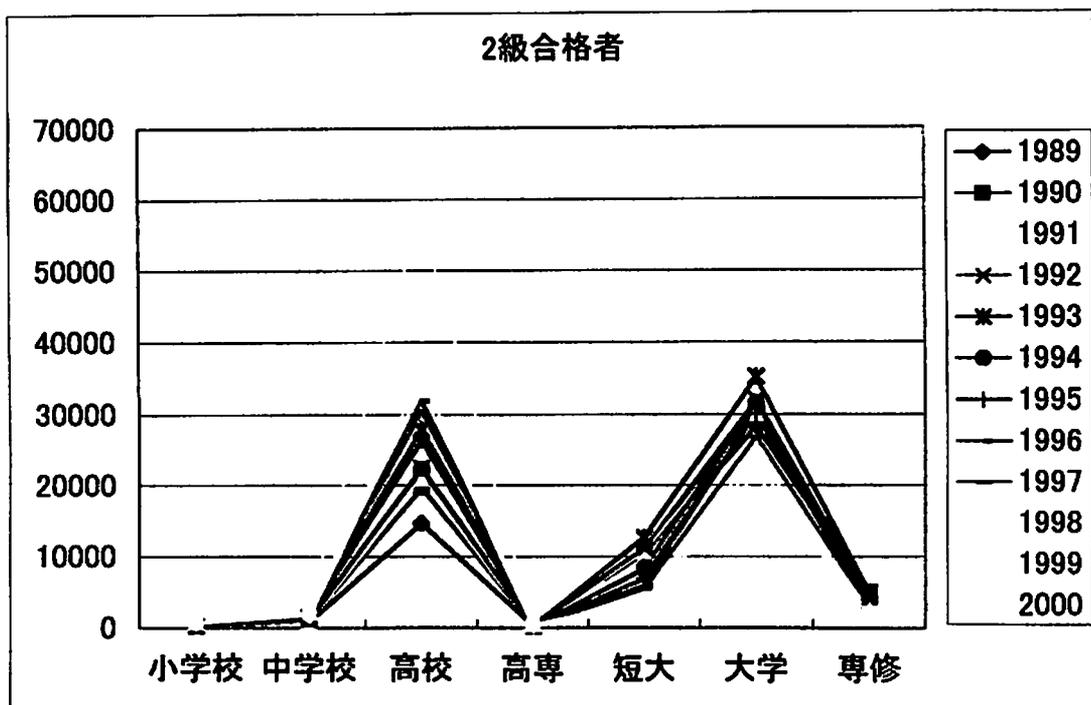


図6. 学生の準2級合格者

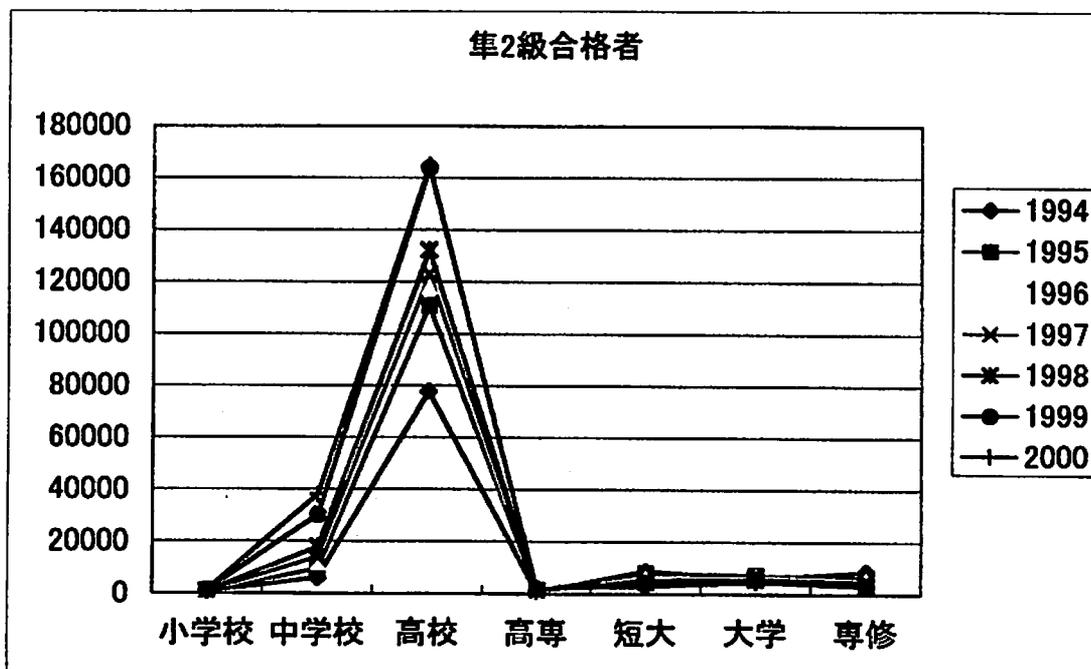


图 7. 英檢志願者数

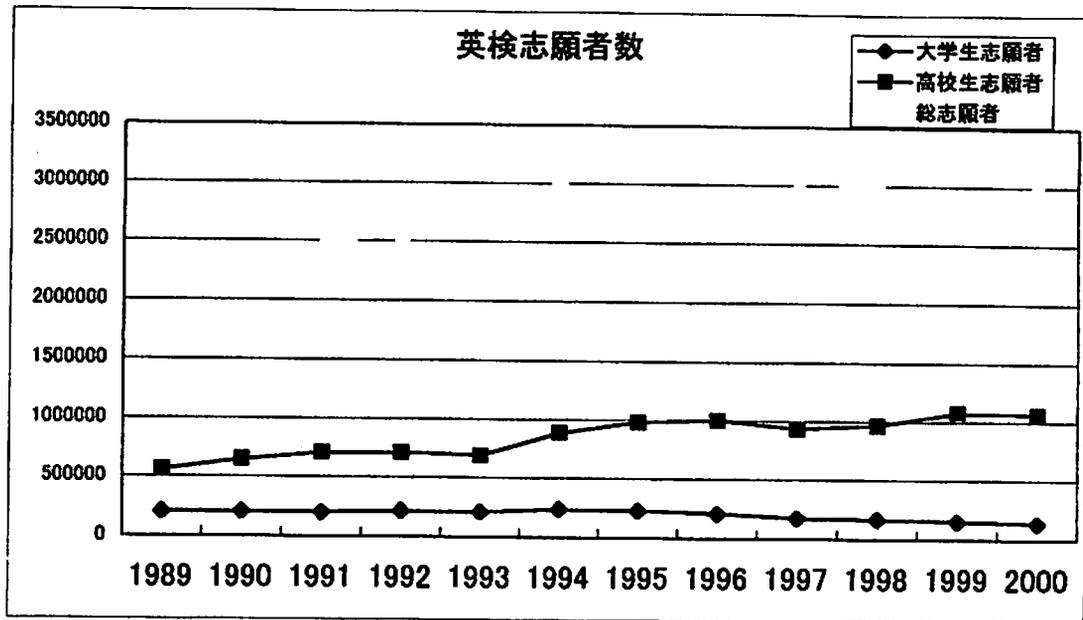


图 8. 英檢合格者数

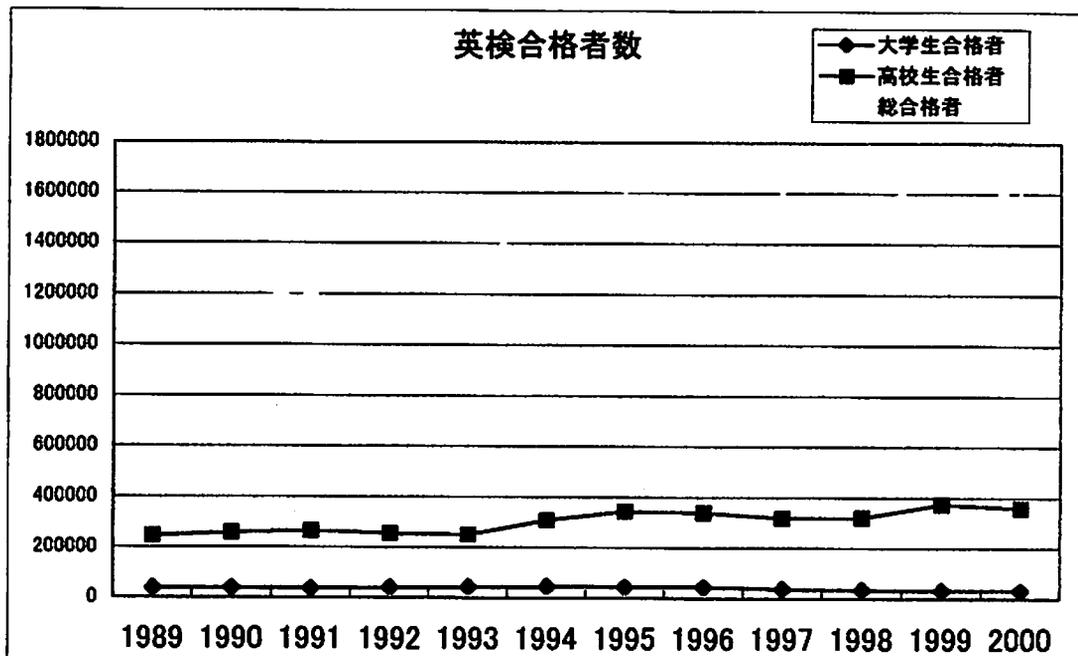


図9. 学生ハイレベル英検受験者

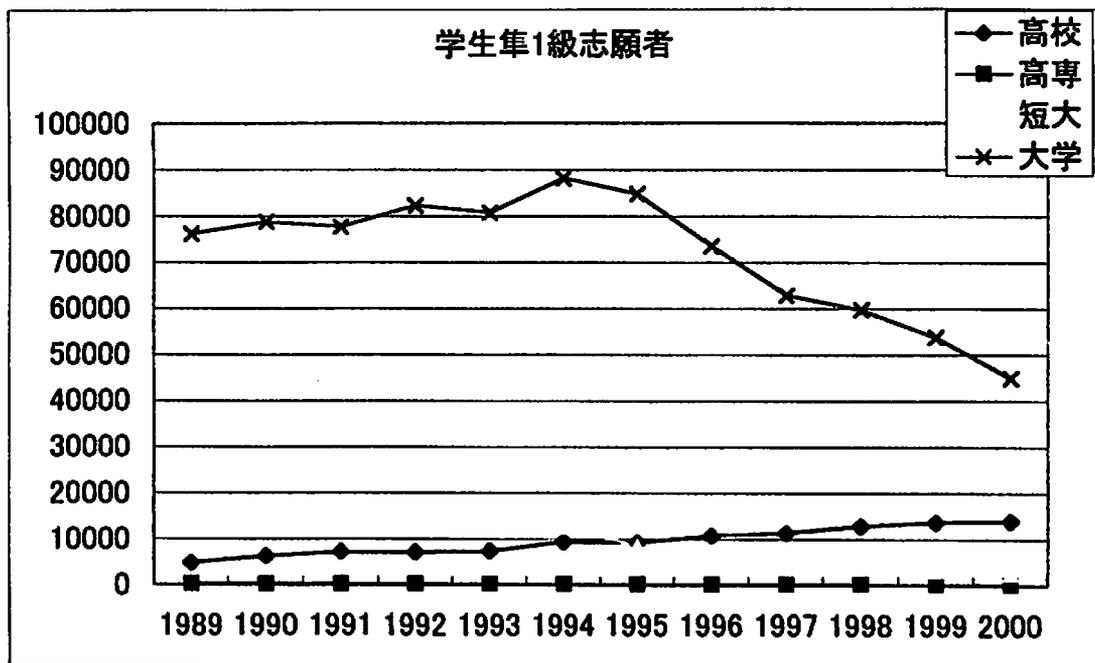
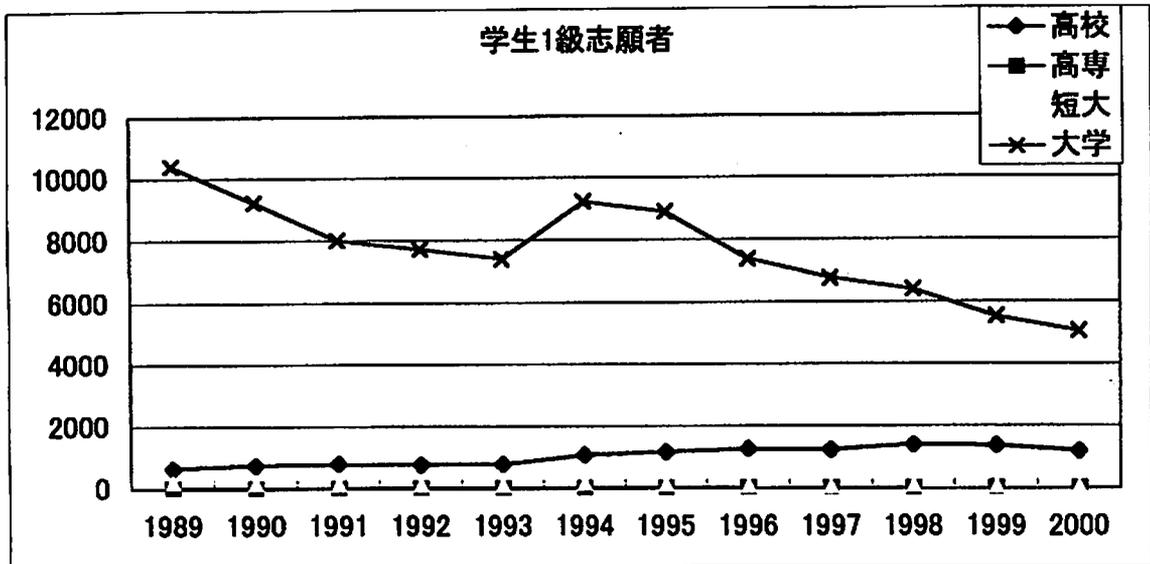
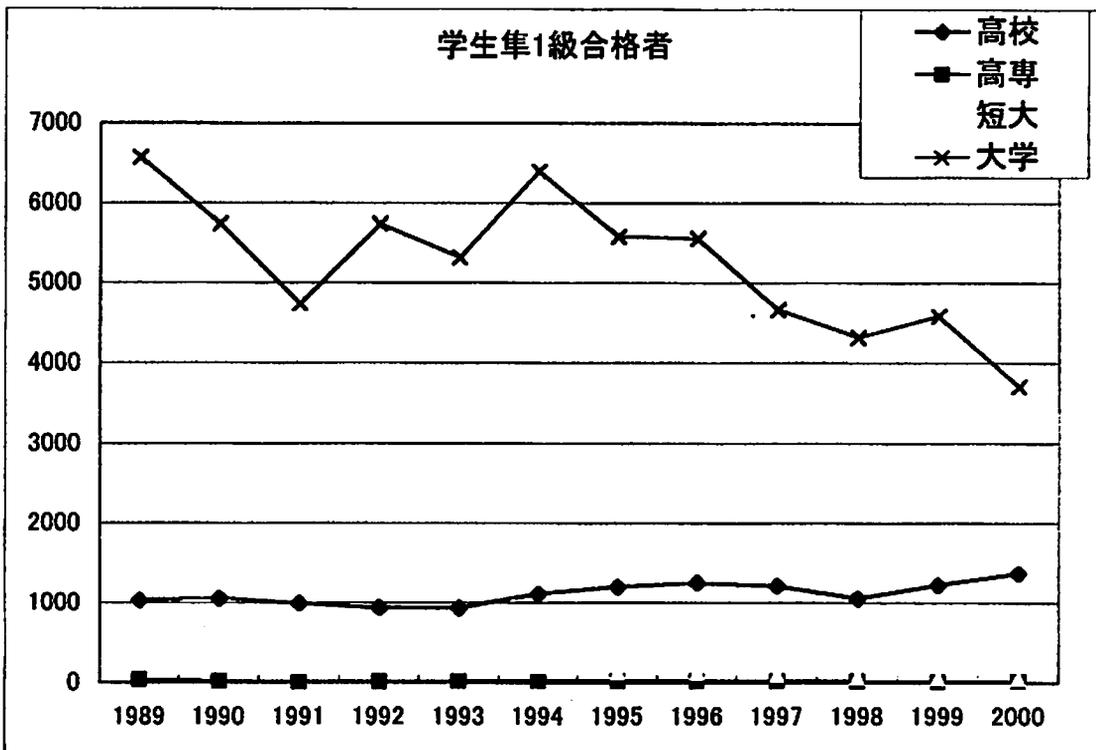
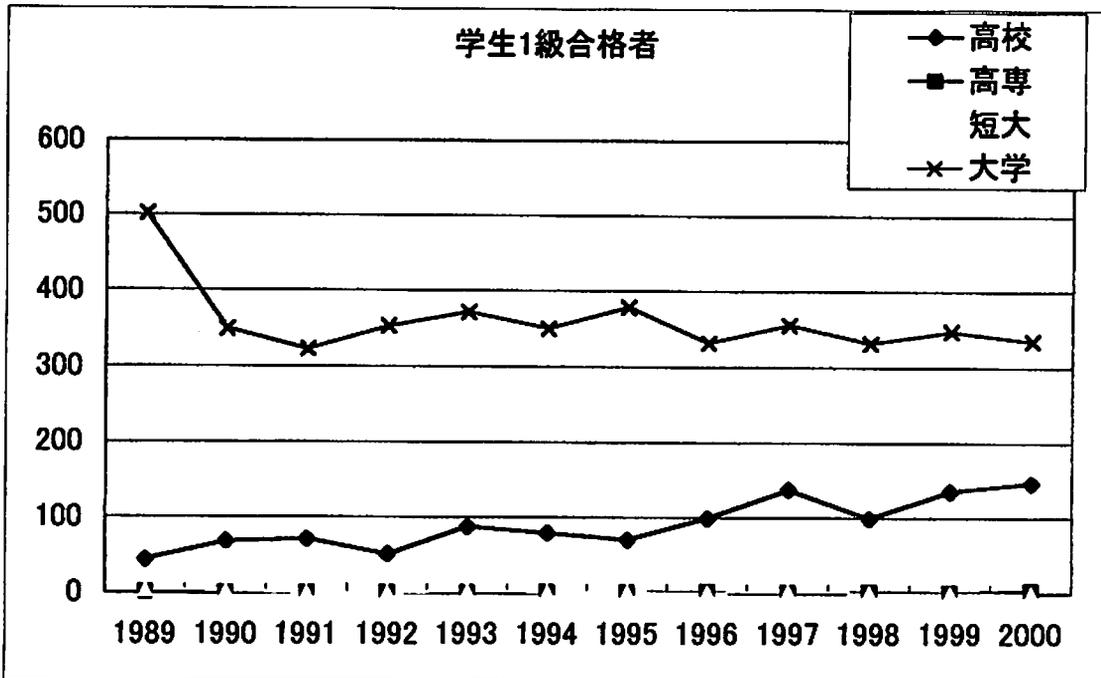


図10. 学生ハイレベル英検合格者



II. その他の資格試験から見た大学生の英語力

(Test of English for International Communication)

図11. 日本人・社会人のTOEICの点数

| | | Total | Listening | Reading |
|--------------------------------|------|-------|-----------|---------|
| 大卒新入社員全体 | | 450 | 239 | 211 |
| 英語を使用する社員 (現在業務上もしくは日常生活上で) | 技術部門 | 487 | 263 | 224 |
| | 営業部門 | 563 | 303 | 260 |
| | 海外部門 | 657 | 349 | 308 |
| 海外滞在経験者 (6ヶ月以上) | 技術部門 | 629 | 341 | 288 |
| | 営業部門 | 710 | 386 | 324 |
| | 海外部門 | 751 | 399 | 352 |

(出典『TOEIC Official Web Site in Japan』2001年)

図12. 学校別TOEIC受験者と平均スコア

N=151,848

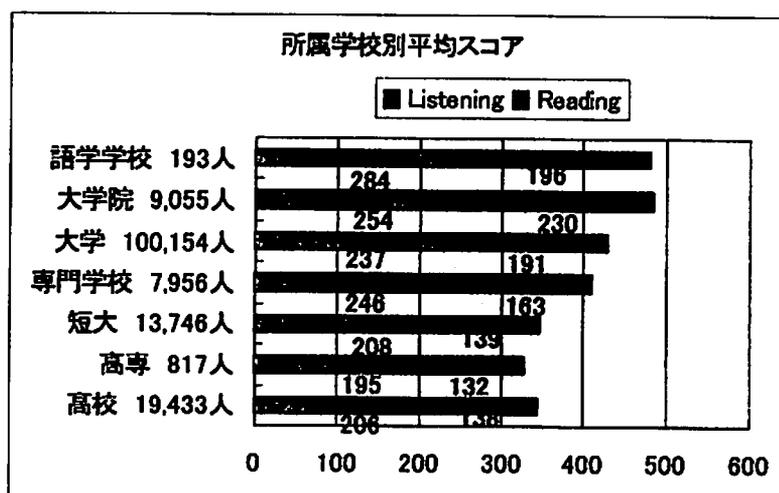
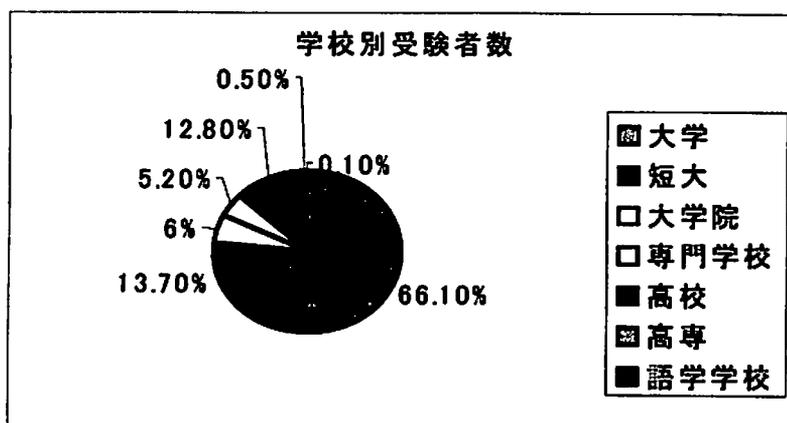


図 13. TOEFL の点数に見る日本人の英語レベル

| 母国語 | TOEFL の点数 | | TOEFL 点数の伸び |
|------|-----------|------|-------------|
| | 1987～89 | 1996 | |
| 日本語 | 485 | 494 | 9 |
| 中国語 | 509 | 535 | 44 |
| 韓国語 | 505 | 510 | 5 |
| ドイツ | 586 | | |
| フランス | 551 | | |
| スペイン | 534 | | |

資料 1. 新聞の記事

「豊かさ勝ち取るには英語だ」

英語にこだわるのは中国の国力を高めたいからです。英語を身に付け、巨大なアメリカ始業を一時期の日本製品のように中国製品で埋め尽くすのです。(独自の学習法「楓狂英語」が大人気の李陽さん)

彼らはダフ屋。売っているのは、人気があって売り切れになった英語専門学校「新東方学校」の口座の受講チケットだ。構内の講座案内板にも生徒が群がっている。...

副校長の王強(39)は言う。「英語はパワフルな道具です。英語が使えなければアメリカとリンクできない。グローバル経済の果実を、もぎ取れないのです。」

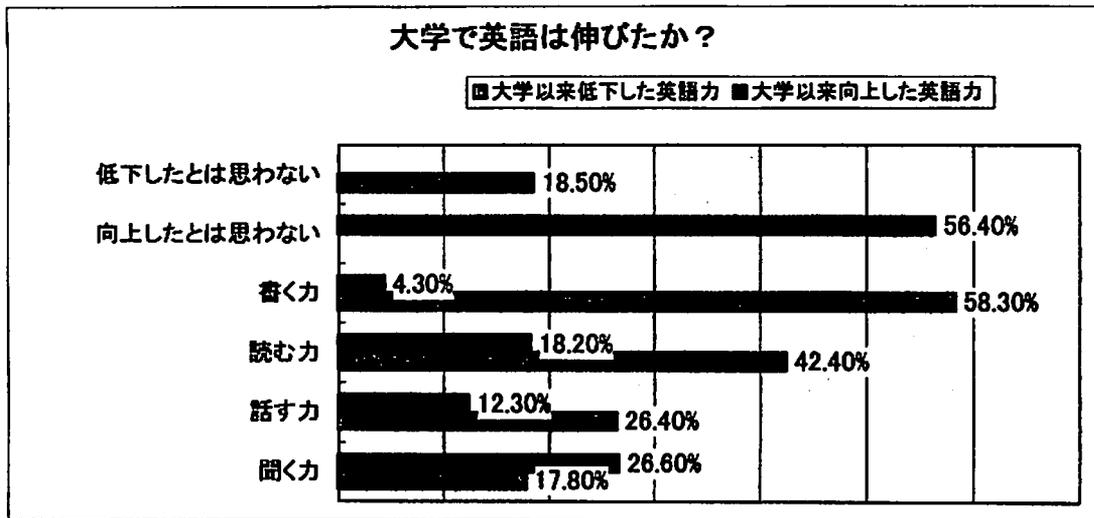
朝日新聞：2002年1月3日

III. 大学の現場より

出典：「大学英語教育に関する実態と将来像の総合的研究（II）」——学生の立場——
 （研究機関慶應義塾大学（経済学部） & 共同研究グループ 大学「一般英語」教育実
 態調査研究会 1985年3月）

アンケート対象 N=9,981（関東 35.4%，京阪神・名古屋 30.8%，その他 29.9%）
 （4年生大学 85.4%、文系 44.4%・理系 30.4%）

図 14. 大学の授業で英語の力が付いたと思いますか？



低下した英語力・回答者数 10,257

向上した英語力・回答者数 12,028

大学での授業にどのように取り組みましたか？

図 15. 大学での授業態度

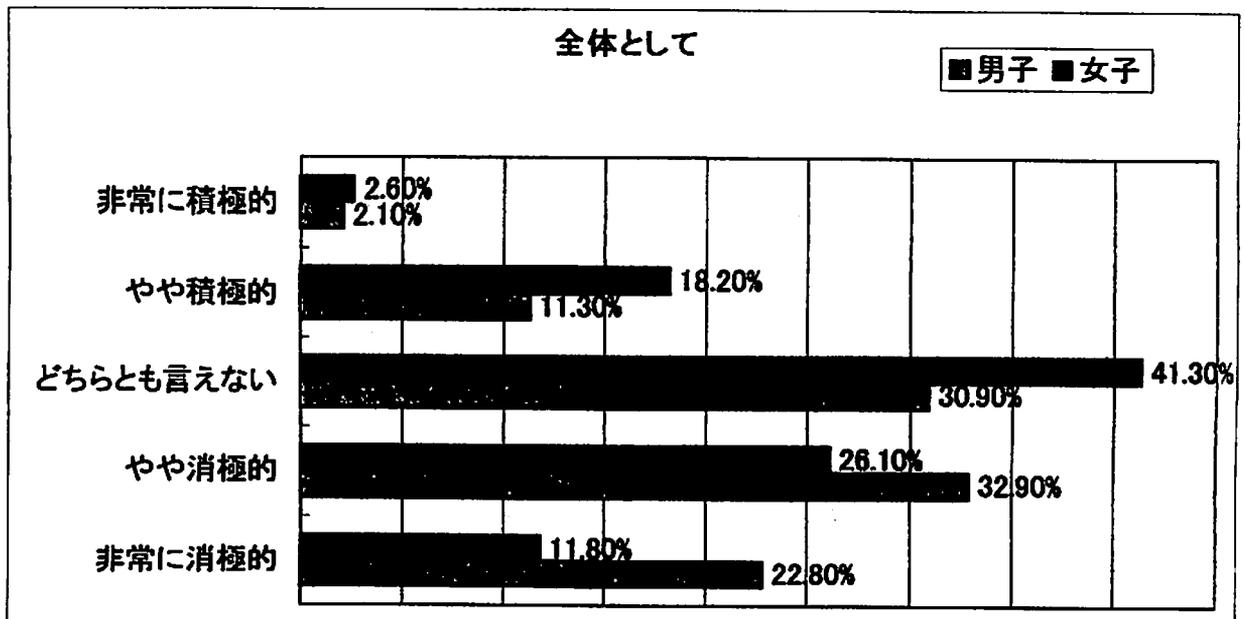


図 16. 大学生の英語に関連する過去の情報

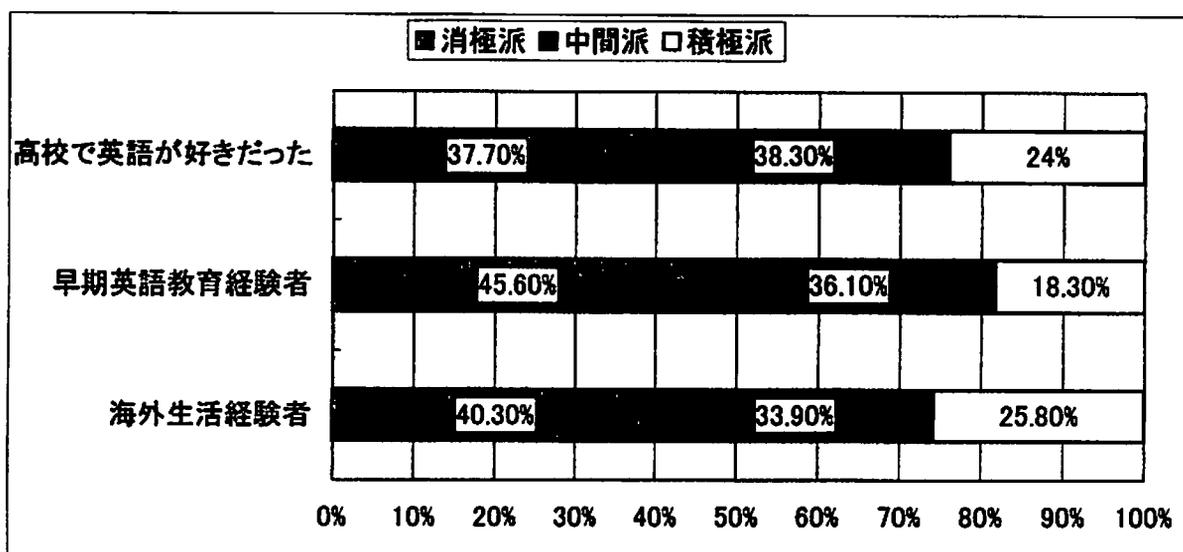
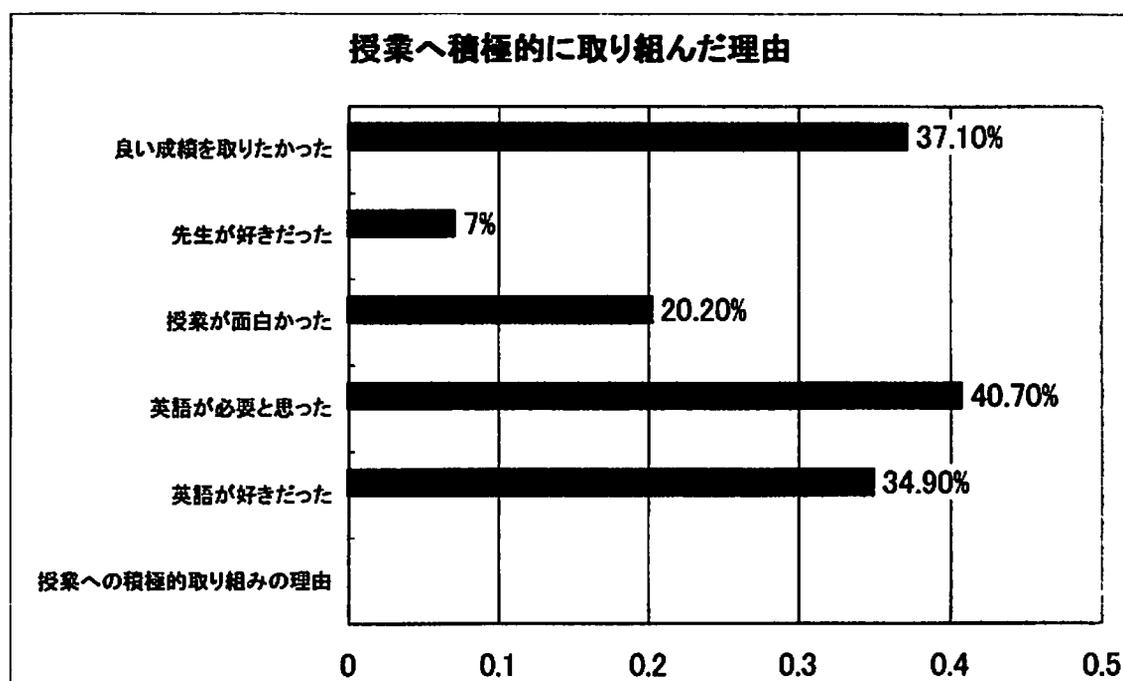
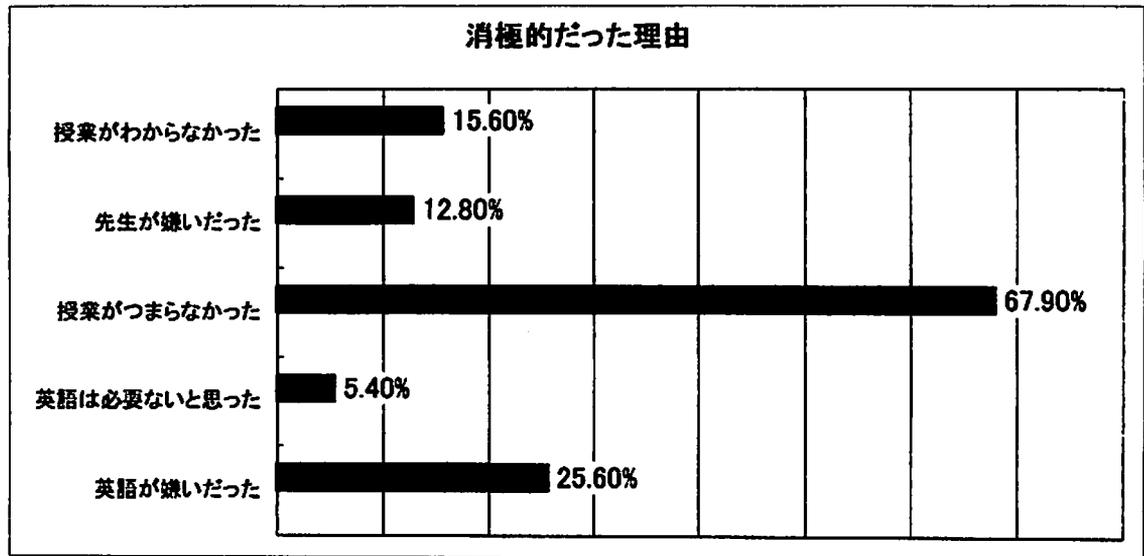


図 17. 大学の英語の授業に積極的に取り組んだ理由



回答数 2,720

図18. 大学の英語の授業に消極的だった理由



回答数 6,239

大学での英語力と中学、高校の授業との関係

図19. 学校別による中学での英語授業数

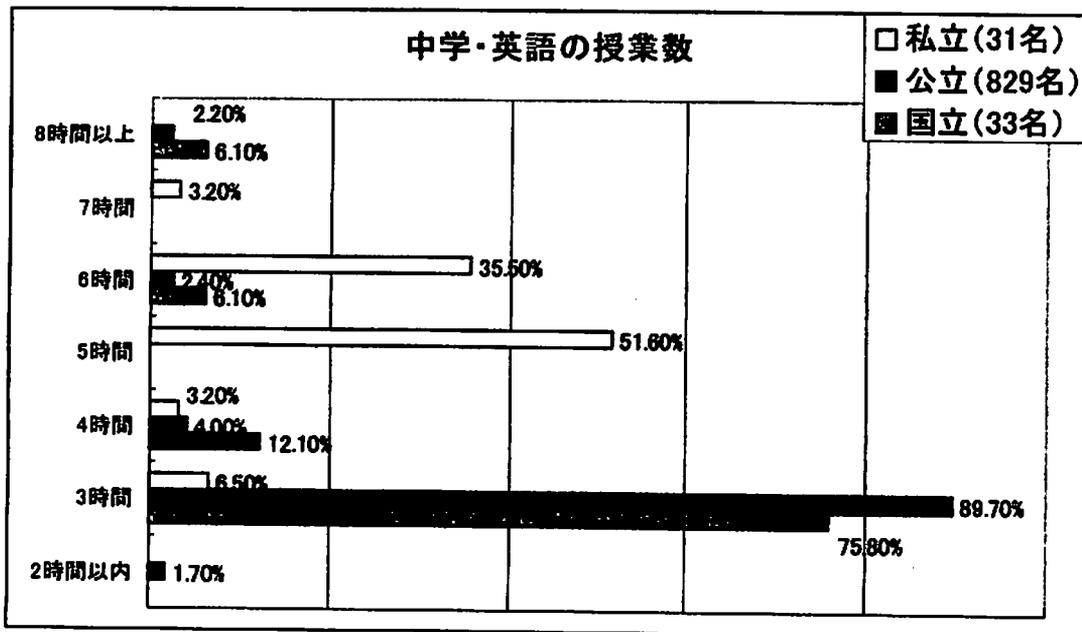
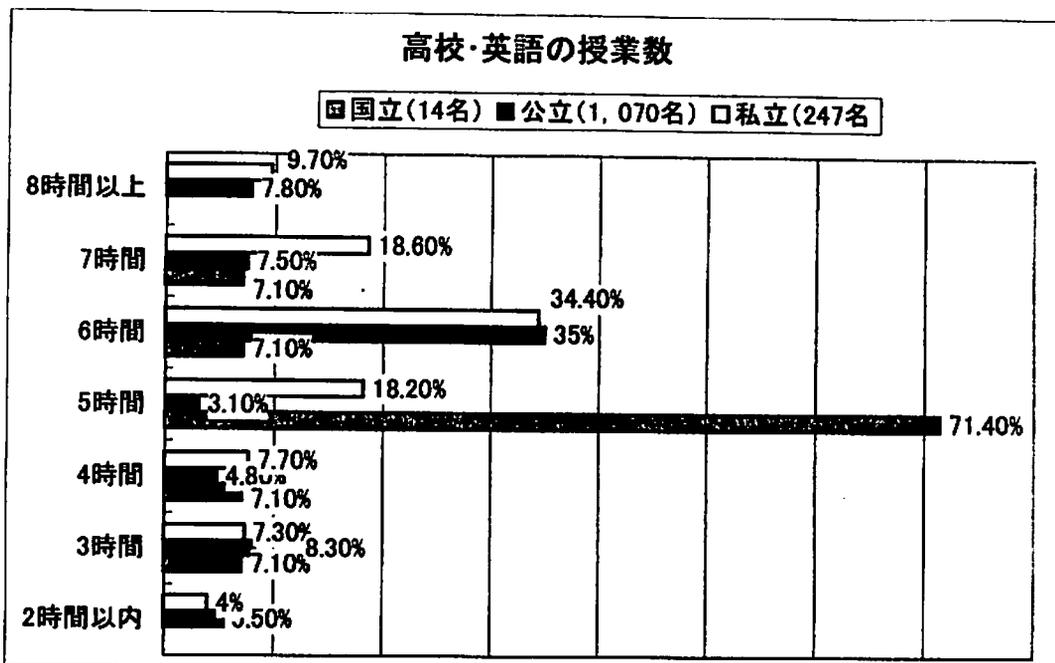
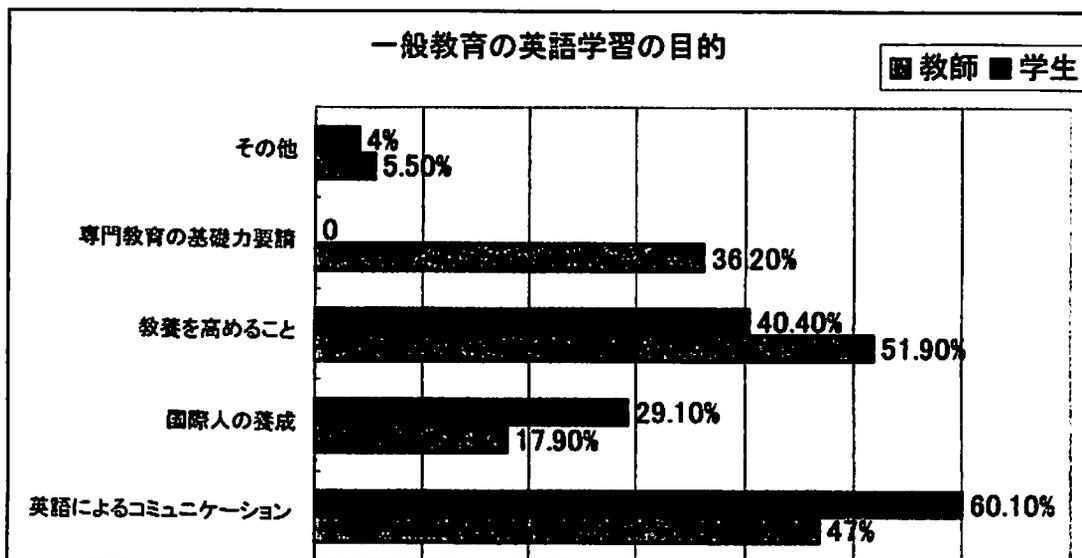


図 20. 学校別による高校での英語授業数



一般教育の英語学習の目的とは？

図 21. 大学でみる英語学習の目的



学生回答者数 10,315

教師回答者数 1,001

図 2 2. 大学の英語の授業での重点目標

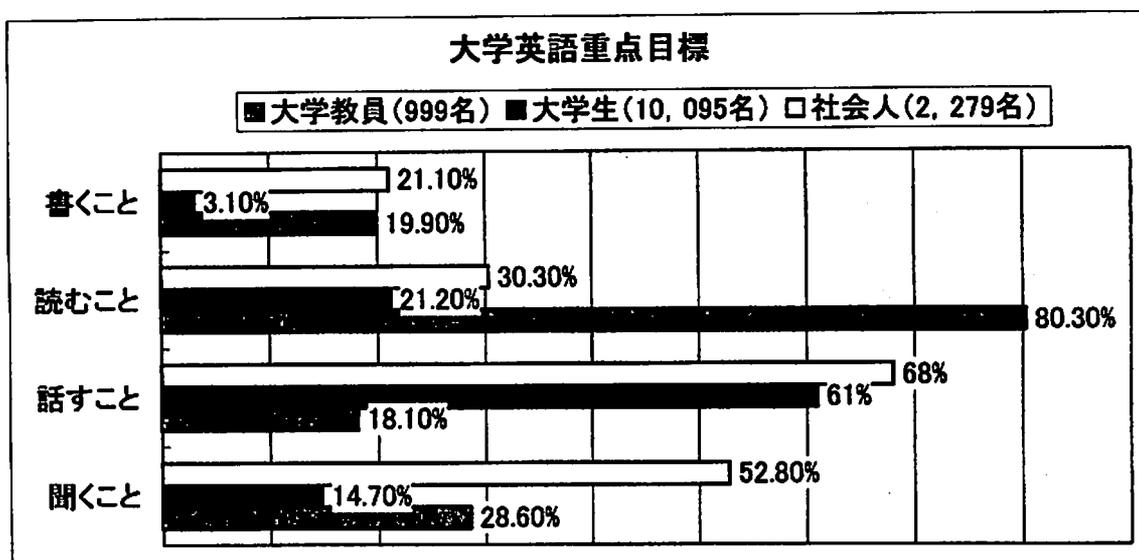


図 2 3. 大学と英会話スクールの授業形態の比較

| | 大学 | 英会話スクール |
|----------------|----------------------------------|---------------------------|
| クラスサイズ | 大 | 小 |
| コミュニケーション能力の指導 | コミュニケーションの練習ができない。 | 会話練習に中心がおかれる。 |
| カリキュラムの一貫性 | 各教師がバラバラのテーマで授業を展開。全体としての関連性がない。 | 具体的な目標設定によりクラスが編成されている。 |
| 目標設定 | 各学生にまかされる | 教育担当者が目標実現のための指導を行なう。 |
| 履修科目 | あまり自由がない。 | 目標実現のために必要なクラスを選択。履修指導あり。 |
| 学習効果の確認 | ほぼ定期試験のみ。 | 定期的に成果を調べるテストあり。 |

(出典：卒業研究「英会話スクールと大学の英語」 龍谷大学：加藤哲明氏)

フォーラム2002：英語力を問う

ワークショップ

1) 英語検定教科書を問う：オーラル・コミュニケーションを中心に

共愛学園高等学校英語科 亀山 孝

I. 今回のワークショップの目的

「何年も英語を勉強したにもかかわらず、英語を聞く・話すことができない人がほとんどである」、「国際化の時代には最低限必要な英語でのコミュニケーション能力の基礎を学校で教えて欲しい」、というようなことが言われています。今の日本の英語教育について、特に話す・聞くことの能力の開発・発達について疑問視されているようです。英語でのオーラル・コミュニケーション能力について、日本人は何を求め、また日本人には何が求められているのでしょうか。

日本が国家として求める英語コミュニケーション能力は、学習指導要領(資料1・2)に記されています。その背景には様々な思惑が存在しているようですが、国家目標に学習者を近づけるため、主たる教材として教科書(資料3)が用意されています。そのため、いろいろなオーラル・コミュニケーション用の教科書(資料4)が各出版社から発行されています。

今回のワークショップは、英語教育に大きく関わり、相当な影響力を持つ「検定教科書」を取り上げ、その存在意義を共に考えることを目的としています。さらに、アンケートによる実態調査を踏まえて、国家目標と生徒及び実際の教科指導との「ズレ」を感じとり、日本人に適したオーラル・コミュニケーション指導方法を考える時間を持つことも今回のワークショップを開く主な理由です。

科目としてのオーラル・コミュニケーションは、平成六年(1994年)に高等学校一年に入学した生徒から学年進行で適用されました。本資料では、話し合いの参考になればと思い、オーラル・コミュニケーション導入の少し前の時期から最近までの日本のTOEFLのスコア(資料5)を載せておきました。

II. アンケート

1. 生徒対象アンケート

- 1 以下のいずれを勉強していますか
ア、オーラルコミュニケーション A
イ、オーラルコミュニケーション B
ウ、オーラルコミュニケーション C
- 2 何年次での実施ですか
()年次
- 3 題あたりの時間数は
()時間
- 4 担当教師について
ア、日本人
イ、外国人
ウ、ティームティーチング
- 5 使用教科書について(視聴覚教材含む)
ア、検定教科書のみ
イ、検定外教科書の併用
ウ、教師独自の作成教材の併用

エ、イとウを合わせて

6 検定教科書について

- ①自己の興味レベルに合っている
ア、合っている イ、合っていない
- ②自己の言語レベルに合っている
ア、合っている イ、合っていない
- ③自己の知識レベルに合っている
ア、合っている イ、合っていない
- ④教科書全体の内容レベル
ア、高い イ、中程度 ウ、低い

アンケート結果

1. 生徒対象 (2校 N=454)

- 1 ア(OCA) - 0 イ(OCB) - 454 ウ(OCC) - 0
- 2 1年次 - 216、 2年次 - 238
- 3 2時間 - 454
- 4 ア(日本人) - 0 イ(外国人) - 454 ウ(タイム・ティーチング) - 0
- 5 アー 53 (11.67%)
イー 2 (0.44%)
ウー 12 (2.64%)
エー 48 (10.57%)
ア・イー 1 (0.22%)
ア・ウー 326 (71.81%)
ア・エー 1 (0.22%)
イ・ウー 1 (0.22%)
無回答 - 10 (2.20%)
- 6 ①
 アー 307 (67.62%)
 イー 139 (30.62%)
 ②
 アー 292 (64.32%)
 イー 154 (33.92%)
 ③
 アー 289 (63.66%)
 イー 155 (34.14%)
 ④
 アー 44 (9.69%)
 イー 369 (81.28%)
 ウー 32 (7.05%)

文教大学付属高等学校・外国語科の笹山祐子先生のご協力により、先生が勤務する高校の生徒さんからの協力を得ることができ、また、亀山の勤務校である共愛学園高等学校の生徒からの協力を得て、2つの高等学校にて本「生徒対象アンケート」を実施することができました。今回のアンケート結果により、すべてを照れるわけではありませんが、何らかの参考には必ずなるはずであると思います。

両校共に、学年は異なりますが、オール・コミュニケーション B をすべて外国人教師の担当により実施しています。特に、5「使用教科書について」への回答では、ア(検定教科書のみ)とウ(教師独自の作成教材の併用)の組み合わせが際立っています。これは、担当する教師が独自の教材を用いることで、教科書の内容を補っていると言えるでしょう。確かに、教科書は、国が目標とする内容を抽象的にまとめ上げ、全体に共通して利用できるよう作られているため、生徒の実態に合わせて用いる場合に、多少の補いが必要とされるに違いありません。特に、オー

ラル・コミュニケーションの教授を工夫する際には、目の前にいる生徒の興味・関心や英語のレベルを相当考慮しなければならず、教師自らによる教材が必要になるのは当然と言えるでしょう。さらに、ア(検定教科書のみ)との回答も多くありますが、この場合でも配布するような教材がないだけで、何らかの形でかなり教科書を補っているのではないのでしょうか。また、5「使用教科書について」では、様々な回答が生徒側から寄せられていますが、これは両校に共通して、オーラル・コミュニケーションの授業を複数の外国人教師が担当していることからくるものと思われる。

6「検定教科書について」では、まず①から③までに關する結果を見ますと、「合っていない」とする回答が3割を超えています。アンケートの選択肢が「合っている」か、「合っていない」だけなので断定することは避けなければなりません、3人に1人の割合で教科書に満足できていないようです。生徒からすれば、現在の自分の英語力と要求される英語力を反映する教科書との間には、確実に何らかの「溝」が存在するようです。さらに、視点を変えますと、生徒自身の持っている英語に関する力が、教科書に「合っている」ということは、教科書の作成に際し各出版社が実際の高校生を非常によく分析していることを証明しているかのようです。さもないと、生徒側に積極的な妥協があると見られてしまうからです。

6「検定教科書について」の④についてですが、担当教師の意見や感想とは別に、概して両校の生徒は現在使用している教科書には好意的だと言えるでしょう。

アンケート協力：文教大学付属高等学校
共愛学園高等学校

2. 教師対象アンケート

- 1 以下のどの科目を行っていますか
ア、OCA イ、OCB ウ、OCC
- 2 どの学年での実施ですか
ア、1年 イ、2年 ウ、3年
- 3 担当教師について
ア、日本人のみ イ、外国人のみ ウ、ティーム・ティーチング エ、その他
- 4 授業での検定教科書の利用率について
ア、1～25% イ、26～50% ウ、51～75% エ、76～100%
- 5 検定教科書以外の使用教材について
ア、使用せず イ、独自に作成 ウ、市販の教材
エ、他の検定教科書の併用 オ、その他
- 6 何単位ですか
()単位
- 7 その他、コメントがありましたらお願いします

アンケート結果

2. 教師対象 (発送数 250 校、回答数 130 校、回答率 52.5%)

| | | | | |
|---|-----|----|----------|-------|
| 1 | OCA | 76 | (41.53%) | N=183 |
| | OCB | 89 | (48.63%) | |
| | OCC | 18 | (9.84%) | |
| 2 | 1年 | 96 | (47.52%) | |
| | 2年 | 61 | (30.20%) | |

| | | | |
|--------------|----|----------|-------|
| 3年- | 45 | (22.28%) | N=202 |
| *1-2 | | | |
| 1年-OCA | 60 | (29.70%) | |
| -OCB | 34 | (16.83%) | |
| -OCC | 2 | (0.99%) | |
| 2年-OCA | 16 | (7.92%) | |
| -OCB | 43 | (21.29%) | |
| -OCC | 2 | (0.99%) | |
| 3年-OCA | 5 | (2.47%) | |
| -OCB | 23 | (11.39%) | |
| -OCC | 17 | (8.42%) | N=202 |
| 3 ア(日本人) | 39 | (25.83%) | |
| イ(外国人) | 14 | (9.27%) | |
| ウ(ティム・ティンナ*) | 96 | (63.58%) | |
| エ(その他) | 2 | (1.32%) | N=151 |
| *1-3 | | | |
| 日本人-OCA | 16 | (7.34%) | |
| -OCB | 30 | (13.76%) | |
| -OCC | 5 | (2.29%) | |
| 外国人-OCA | 8 | (3.67%) | |
| -OCB | 12 | (5.50%) | |
| -OCC | 7 | (3.21%) | |
| TT -OCA | 61 | (27.98%) | |
| -OCB | 63 | (28.90%) | |
| -OCC | 14 | (6.42%) | |
| その他-OCA | 1 | (0.46%) | |
| -OCB | 1 | (0.46%) | |
| -OCC | 0 | (0.00%) | N=218 |
| 4 ア- | 27 | (20.30%) | |
| イ- | 26 | (19.55%) | |
| ウ- | 30 | (22.56%) | |
| エ- | 48 | (36.09%) | |
| ◇その他(0%使用)-2 | | (1.50%) | N=133 |
| *3-4 | | | |
| 日本人-ア | 9 | (5.96%) | |
| -イ | 7 | (4.64%) | |
| -ウ | 6 | (3.97%) | |
| -エ | 17 | (11.26%) | |
| 外国人-ア | 5 | (3.31%) | |
| -イ | 4 | (2.65%) | |
| -ウ | 1 | (0.66%) | |
| -エ | 4 | (2.65%) | |
| TT -ア | 15 | (9.93%) | |
| -イ | 20 | (13.24%) | |
| -ウ | 26 | (17.22%) | |
| -エ | 35 | (23.18%) | |
| その他-ア | 0 | (0.00%) | |
| -イ | 1 | (0.66%) | |
| -ウ | 0 | (0.00%) | |
| -エ | 1 | (0.66%) | N=151 |
| 5 ア- | 13 | (8.55%) | |
| イ- | 71 | (46.71%) | |
| ウ- | 60 | (39.47%) | |
| エ- | 4 | (2.63%) | |
| オ- | 4 | (2.63%) | N=152 |

* 4 - 5

1 ~ 25%

| | | |
|---|----|---------|
| ア | 1 | (0.62%) |
| イ | 15 | (9.26%) |
| ウ | 15 | (9.26%) |
| エ | 2 | (1.23%) |
| オ | 1 | (0.62%) |

26 ~ 50%

| | | |
|---|----|---------|
| ア | 0 | (0.00%) |
| イ | 16 | (9.88%) |
| ウ | 16 | (9.88%) |
| エ | 1 | (0.62%) |
| オ | 1 | (0.62%) |

51 ~ 75%

| | | |
|---|----|----------|
| ア | 1 | (0.62%) |
| イ | 20 | (12.35%) |
| ウ | 17 | (10.49%) |
| エ | 0 | (0.00%) |
| オ | 0 | (0.00%) |

76% ~ 100%

| | | |
|---|----|----------|
| ア | 11 | (6.79%) |
| イ | 25 | (15.43%) |
| ウ | 14 | (8.64%) |
| エ | 1 | (0.62%) |
| オ | 3 | (1.85%) |

0%

| | | |
|---|---|---------|
| ア | 0 | (0.00%) |
| イ | 0 | (0.00%) |
| ウ | 1 | (0.62%) |
| エ | 0 | (0.00%) |
| オ | 1 | (0.62%) |

N=162

| | | | |
|---|------|-----|----------|
| 6 | 1 単位 | 27 | (14.76%) |
| | 2 単位 | 141 | (77.05%) |
| | 3 単位 | 15 | (8.19%) |

N=183

* 1 - 6

OCA

| | | |
|------|----|----------|
| 1 単位 | 17 | (9.29%) |
| 2 単位 | 55 | (30.05%) |
| 3 単位 | 4 | (2.19%) |

OCB

| | | |
|------|----|----------|
| 1 単位 | 7 | (3.83%) |
| 2 単位 | 75 | (40.98%) |
| 3 単位 | 7 | (3.83%) |

OCC

| | | |
|------|----|---------|
| 1 単位 | 3 | (1.64%) |
| 2 単位 | 11 | (6.01%) |
| 3 単位 | 4 | (2.19%) |

N=183

- 7 ① 現行の教科書は使いづらい (3)
 ② 教科書以外の教材が必要 (12)
 ③ 名目上 2 単位を、1 単位 - OC、1 単位 - 文法 (7)
 ④ 名目上 2 単位すべて文法の授業に当てる (2)
 ⑤ 教授方法の改善が必要 (8)

今回この「教師対象アンケート」には、実に 130(発送数 250 校、回答率 52.5%)もの高等学校から、貴重な先生

方のご意見が寄せられ、本ワークショップで扱います「英語検定教科書を問う」を考える際に欠かせない結果を得ることができました。ご協力いただきました先生方には、この場をお借りして感謝の意を表す次第です。

オーラル・コミュニケーション A 及び B の実施が目立ちます。また、1 年次での実施が多いようです。学校によっては、たとえば、オーラル・コミュニケーション A と B、またはオーラル・コミュニケーション B と C の両科目を実施している場合があります。学年と実施科目との関係は、表「*1-2」にまとめてあります。

表 3 から分かるように、教師が担当する形としてはチームティーチングが多いと言えます。科目と担当教師との関係では、現れたパターン(N=218)を表「*1-3」にまとめました。パターンの多さは、ある学校では、オーラル・コミュニケーション A はチームティーチングでオーラル・コミュニケーション B は日本人が担当し、またある学校では、オーラル・コミュニケーション A は日本人で、オーラル・コミュニケーション B は外国人が担当しているためです。

表 4 から分かることは、各学校の置かれている状況により異なるでしょうが、検定教科書はかなり広範囲な利用がなされているようです。

担当教師と教科書利用率との関係を見たものが表「*3-4」にあります。教科書を授業中よく用いているのは日本人教師が単独の場合とチームティーチングの場合といえます。母集団のこともあります。比較的日本人教師が関与すると検定教科書を利用する割合が高くなると言えるでしょう。

表 5 で示されているように、検定教科書以外で使用する教材では、「独自に作成」したものや「市販の教材」が多くの高校で利用されているようです。さらに、表「*4-5」でも何えるように、「独自に作成」したものや「市販の教材」を先生方が用いることは、授業での検定教科書の利用率にはほとんど関係なく、様々な状況下でのオーラル・コミュニケーション授業の場面で展開されていると言えます。つまり、先生方は実際に接する生徒の実態に合わせて、日々工夫している様子がよく何えると言って過言ではないようです。

表 6 と表 7 についてですが、オーラル・コミュニケーション A、B、C のいずれも 2 単位構成が圧倒的です。ところが、先生方の勤務校での様子を報告していただいたものから察しますと、名目上オーラル・コミュニケーションとしてはいるものの、実際は文法指導に当てている場合(9 件=6.92%)があるようです。これは、今回ご回答をいただいた先生方の学校に限らず、日本全体がこのような傾向にあるのではないかと思います。資料 2 に挙げた高等学校学習指導要領でうたわれている「目標」にかなり近づいている高校も多くあると思いますが、形だけのオーラル・コミュニケーションの授業を展開せざるを得ない状況にある高校もあるようです。なお、本アンケートの 7 への答えからすべて判断できませんが、資料 5 にある TOEFL のスコアの推移は理解できるところと言えます。つまり、際立った点数の伸びが、Listening Comprehension に見られないのは、Listening の強化が行われてきていないことを示唆している可能性があります。そこには何らかの検定教科書や英語教授方法の影響があるのでしょうか。確かに、英語学習者の全員が TOEFL を受けるわけではありませんが、TOEFL 受験者の多くが高等学校でのオーラル・コミュニケーションの授業を経験しているはずで、アンケートへのコメントと TOEFL のスコアが表すものは、今後の英語への提言をしているように思えます。

Ⅲ. 資料

資料 1：中学校学習指導要領(現行)

第 9 節 外国語

第 1 目標

外国語を理解し、外国語で表現する基礎的な能力を養い、外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てるとともに、言語や文化に対する関心を深め、国際理解の基礎を培う。

中学校学習指導要領(新)

第 9 節 外国語

第 1 目標

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う。

第 2 各言語の目標及び内容等

英語

1 目標

- (1) 英語を聞くことに慣れ親しみ、初歩的な英語を聞いて話し手の意向などを理解できるようにする。
- (2) 英語で話すことに慣れ親しみ、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを話すことができるようにする。
- (3) 英語を読むことに慣れ親しみ、初歩的な英語を読んで書き手の意向などを理解できるようにする。
- (4) 英語で書くことに慣れ親しみ、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを書くことができるようにする。

資料 2 : 高等学校学習指導要領(現行)

第 8 節 外国語

第 1 款 目標

外国語を理解し、外国語で表現する能力を養い、外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てるとともに、言語や文化に対する関心を高め、国際理解を深める。

第 2 款 各科目

第 3 オーラル・コミュニケーション A

1 目標

身近な日常生活の場面で相手の意向などを聞き取り、自分の考えなどを英語で話す能力を養うとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。

2 内容

(1) 言語活動

聞くこと及び話すことの言語活動を行わせるため、次の事項について指導する。

ア 自然な口調で話されたり、読まれたりする内容を聞き取ること。

イ 平易な表現で自分の考えなどを相手に話すこと。

ウ 身近な事柄について場面や目的にふさわしい表現で話し合うこと。

(2) 言語材料

—略—

3 内容の取扱い

(1) 話すこと及び聞くことの言語活動については、いずれかの活動に偏ることがないようにする。

(2) 感想、感情などを表わす効果的な表現を指導するよう配慮するものとする。

(3) 言語活動の指導に当たっては、例えば、学校、家庭、社会における日常的な場面を設定し、様々な話題を取り上げるなどの工夫をするものとする。

第 4 オーラル・コミュニケーション B

1 目標

話し手の意向などを聞き取る能力を養うとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。

2 内容

(1) 言語活動

聞くこと及び話すことの言語活動を行わせるため、次の事項について指導する。

ア 自然な口調で話されたり、読まれたりする内容を聞き取ること。

イ まとまりのある文章の概要や要点を聞き取ること。

ウ 聞き取った内容について、自分の考えなどを整理して話すこと。

(2) 言語材料

—略—

3 内容の取扱い

(1) 聞くことについては、場面や目的に応じて段階的に指導するものとする。

(2) 聞き取った内容についての確認や賛否などを表わす効果的な表現を指導するよう配慮するものとする。

(3) 言語活動の指導を当たっては、例えば、説明、スピーチ、朗読、放送などの場面を設定し、様々な話題を取り上げるなどの工夫をするものとする。

第 5 オーラル・コミュニケーション C

1 目標

自分の考えなどを整理して発表したり、話し合う能力を養うとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。

2 内容

(1) 言語活動

聞くこと及び話すことの言語活動を行わせるため、次の事項について指導する。

ア 伝えようとする内容を整理し、大事なことを効果的に話すこと。

イ 相手の意向などを理解し、適切に応じること。

ウ 話し合いの場面や目的に応じ、自分の考えなどを積極的に表現すること。

(2) 言語材料

—略—

3 内容の取扱い

(1) 提案、主張、論証などを表わす効果的な表現を指導するよう配慮するものとする。

(2) 言語活動の指導に当たっては、例えば、レシテーション、スピーチ、ディスカッション、ディベートなどの場面を設定し、様々な話題を取り上げるなどの工夫をするものとする。

高等学校学習指導要領(新)

第8節 外国語

第1款 目標

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする実践的コミュニケーション能力を養う。

第2款 各科目

第1 オーラル・コミュニケーションⅠ

1 目標

日常生活の身近な話題について、英語を聞いたり話したりして、情報や考えなどを理解し、伝える基礎的な能力を養うとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。

2 内容

(1) 言語活動

生徒が情報や考えなどの受け手や送り手になるように具体的な言語の使用場面を設定して、次のようなコミュニケーション活動を行う。

ア 英語を聞いてその内容を理解するとともに、場面や目的に応じて適切に反応する。

イ 関心のあることについて相手に質問したり、相手の質問に答えたりする。

ウ 情報や考えなどを、場面や目的に応じて適切に伝える。

エ 聞いたり読んだりして得た情報や自分の考えなどをまとめ、発表する。また、発表されたものを理解する。

(2) 言語活動の取扱い

ア 指導上の配慮事項

(1) に示すコミュニケーション活動を効果的に行うために、必要に応じて、次のような指導をするよう配慮するものとする。

(ア) リズムやイントネーションなど英語の音声的な特徴に注意しながら、発音すること。

(イ) コミュニケーション活動に必要な基本的な文型や文法事項などを理解し、実際に活用すること。

(ウ) 繰り返しを求めたり、言い換えたりするときなどに必要となる表現を活用すること。

(エ) ジェスチャーなどの非言語的手段の役割を理解し、場面や目的に応じて効果的に用いること。

イ 言語の使用場面と働き

—略—

(3) 言語材料

—略—

3 内容の取扱い

(1) 中学校における音声によるコミュニケーション能力を重視した指導を踏まえ、話題や対話の相手を広げたコミュニケーション活動を行いながら、中学校における基礎的な学習事項を整理し、習熟を図るものとする。

(2) 読むこと及び書くこととも有機的に関連付けた活動を行うことにより、聞くこと及び話すことの指導の効果を高めるよう工夫するものとする。

第2 オーラル・コミュニケーションⅡ

1 目標

幅広い話題について、情報や考えなどを整理して英語で発表したり、話し合ったりする能力を伸ばすとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。

2 内容

(1) 言語活動

「オーラル・コミュニケーションⅠ」の内容の(1)に示すコミュニケーション活動に加えて、次のようなコミュニケーション活動を行う。

ア スピーチなどまとまりのある話の概要や要点を聞き取り、それについて自分の考えなどをまとめる。

イ 幅広い話題について情報や考えを整理し、効果的に発表する。

ウ 幅広い話題について、話し合ったり、討論したりする。

エ スキットなどを創作し、演じる。

(2) 言語活動の取扱い

ア 指導上の配慮事項

(1) に示すコミュニケーション活動を効果的に行うために、必要に応じて、次のような指導をするよう配慮するものとする。

- (ア) まとまりのある話を聞きながら必要に応じてメモを取ること。
- (イ) 意図や気持ちを的確に伝えるために、リズム、イントネーション、声の大きさ、スピードなどに注意しながら発音すること。
- (ウ) 発表や話し合い、討論などの活動に必要な表現を活用すること。
- (エ) 話し合い、討論などの基本的なルールや発表の仕方を学習し、それらを活用すること。

イ 言語の使用場面と働き

—略—

(3) 言語材料

—略—

3 内容の取扱い

「オーラル・コミュニケーション I」の 3 の内容の取扱いと同様に取り扱うものとする。

資料 3 : 教科書とは

1. 教科書の定義

教科書とは、「小学校、中学校、高等学校、中等教育学校及びこれらに準ずる学校において、教科課程の構成に応じて組織排列された教科の主たる教材として、教授の用に供せられる児童又は生徒用図書」であると定められています（発行法第 2 条）。

2. 教科書の使用義務

すべての児童生徒は、教科書を用いて学習する必要があります。学校教育法第 21 条には、小学校においては、文部科学大臣の検定を経た教科書又は文部科学省が著作の名義を有する教科書を使用しなければならないと定められており、この規定は、中学校、高等学校、中等教育学校等にも準用されています。

3. 教科書の種類

教科書には、文部科学省の検定を経た教科書（文部科学省検定済教科書）と、文部科学省が著作の名義を有する教科書（文部科学省著作教科書）とがあります。なお、高等学校、中等教育学校の後期課程及び特殊教育諸学校等において、適切な教科書がないなど特別な場合には、この他の図書の使用が許されることもあります。

4. 我が国における教科書制度の沿革

戦後の学制改革以前においては、小学校用教科書については、届出制度や検定制度の時期もありましたが、明治 37 年以来、国定制度が採用されてきました。また、中学校用教科書については、おおむね検定制度が採用されてきました。

戦後においては、昭和 22 年に制定された学校教育法において、小・中・高等学校を通じて検定制度が採用され、現在に至っています。

（出典：文部科学省－教科書とは）

資料 4 : 代表的使用教科書

| | | |
|-----|--------------|--------|
| OCA | Hello there! | (東京書籍) |
| | Select | (三省堂) |
| | Birdland | (文英堂) |
| OCB | Hello there! | (東京書籍) |
| | Birdland | (文英堂) |
| | Departure | (大修館) |
| OCC | Hello there! | (東京書籍) |
| | Speak Out | (桐原) |

資料 5 : Paper-Based TOEFL Test Scores

July 1999 and June 2000

| | |
|--------------------------------|--------|
| # of Examinees | 99,134 |
| Listening Comprehension | 50 |
| Structure & Written Expression | 51 |
| Reading Comprehension | 51 |

| | |
|---|----------------|
| Total Score Mean | 504 |
| <u>July 1996 through June 1997</u> | |
| # of Examinees | 154,204 |
| Listening Comprehension | 49 |
| Structure & Written Expression | 50 |
| Reading Comprehension | 50 |
| Total Score Mean | 496 |
| <u>July 1992 through June 1994</u> | |
| # of Examinees | 266,249 |
| Listening Comprehension | 49 |
| Structure & Written Expression | 50 |
| Reading Comprehension | 48 |
| Total Score Mean | 493 |

(出典：ETS—TOEFL Test and Score Data Summary)

参考資料

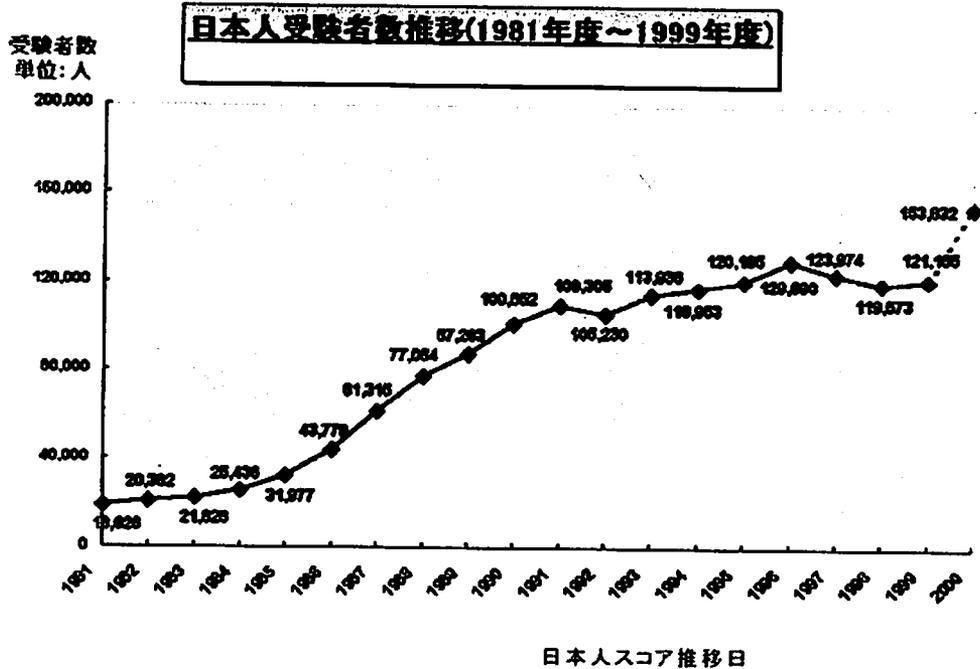
国際教育交換協議会 (CIEE) TOEFL 事業部

TOEFL スコアデータ・グラフ集

米国 ETS(Educational Testing Service)が作成する“TOEFL Test and Score Data Summary”を基に当協議会にて皆様のお役に立つグラフを作成いたしました。ここに掲載するデータは TOEFL 実施団体である、米国 ETS(Educational Testing Service)と、国際教育交換協議会日本代表部に著作権がごございます。データの複写・転用・掲載につきましては当協議会までお問い合わせください。なお、商業目的の媒体(刊行物・ホームページ等含む)への掲載につきましては予めお断り申し上げます。

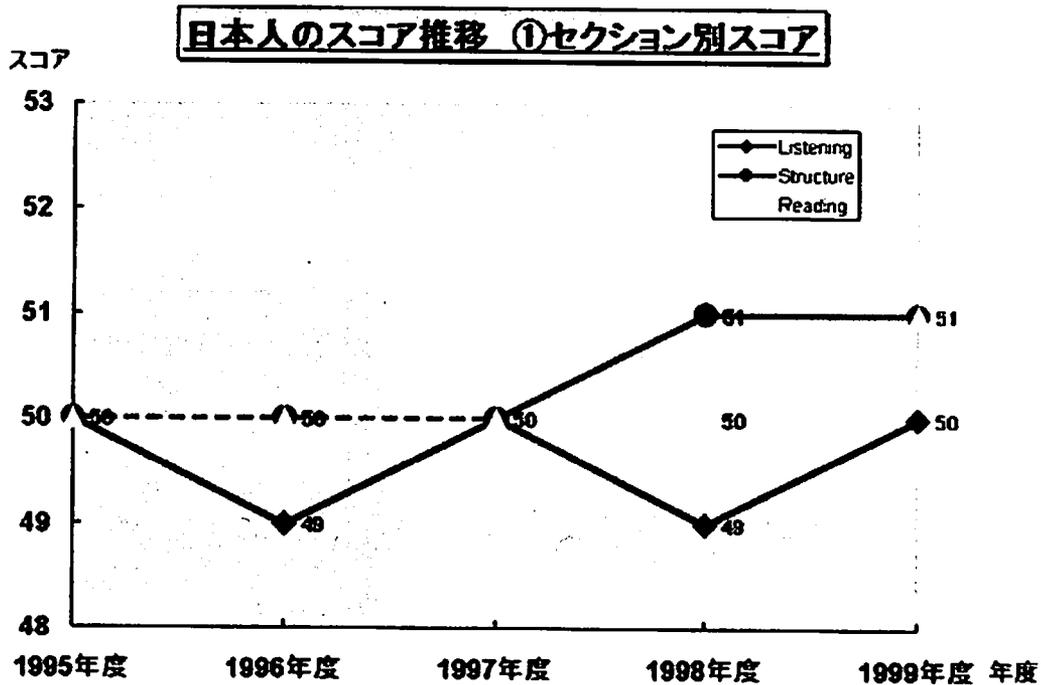
日本人受験者数推移

1981 年度～1999 年度に TOEFL を受験した日本人受験者数の Data です。ここに用いられてる年度は ETS 年度です。ETS 年度とは 7 月 1 日～翌年 6 月 30 日です。また、2000 年度の数値は、2000 年 7 月～9 月までの 3 ヶ月のデータを 4 倍して一年度換算した試算値です。

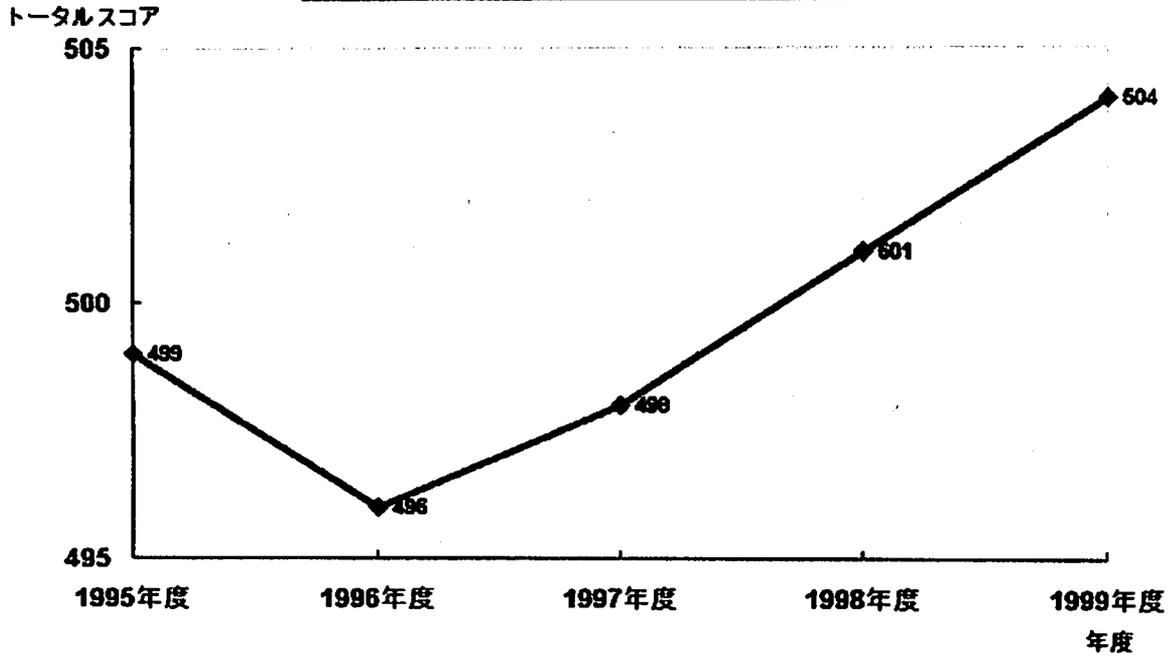


1995年度～1999年度にTOEFLを受験した日本人のスコア推移のデータです。ETS作成の“TOEFL Test and Score Data Summary”を基に当協働会にて加工しました。ここに用いられてる年度はETS年度です。ETS年度とは7月1日～翌年6月30日です。

- ①セクション別スコアの推移
- ②トータルスコアの推移



日本人スコア推移 ②トータルスコア



国別平均スコア(R)

1999年度(1999年7月～2000年6月)のETS作成の“TOEFL Test and Score Data Summary”を基に当協議会にて加工しました。

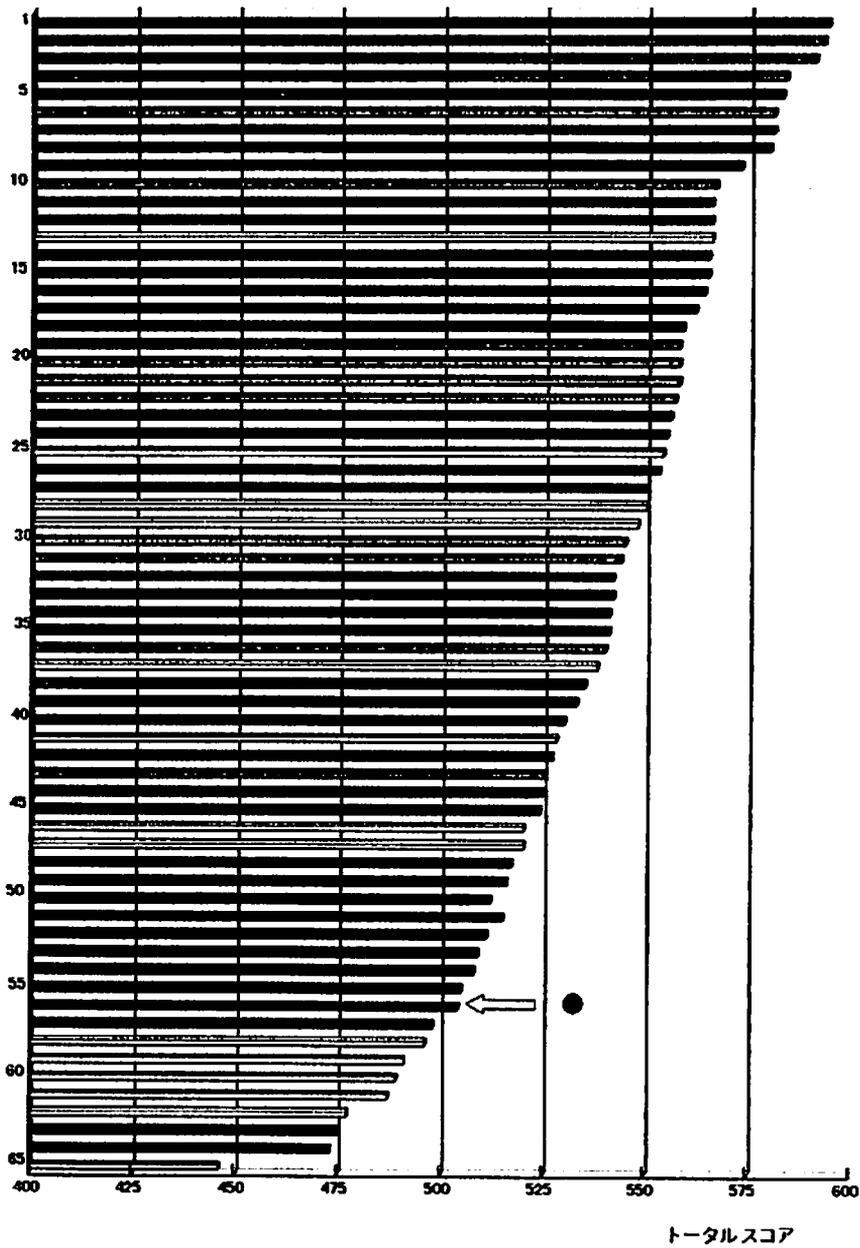
—略—

世界編：国別スコア一覧

世界編

| 順位 | 国名 | Total Score | 順位 | 国名 | Total Score | 順位 | 国名 | Total Score |
|----|------------------------|-------------|----|-------------------|-------------|----|-------------|-------------|
| 1 | Honduras | 594 | 23 | Nepal | 556 | 45 | Hong Kong | 524 |
| 2 | Estonia | 583 | 24 | Sri Lanka | 555 | 46 | Rwanda | 520 |
| 3 | Finland | 581 | 25 | Malawi | 554 | 47 | Madagascar | 520 |
| 4 | Germany | 584 | 26 | Paraguay | 553 | 48 | Peru | 517 |
| 5 | Bhutan | 583 | 27 | Colombia | 550 | 49 | Bangladesh | 516 |
| 6 | Bulgaria | 581 | 28 | Kenya | 550 | 51 | Afganistan | 512 |
| 7 | India | 581 | 29 | Eritrea | 548 | 52 | Thailand | 511 |
| 8 | Uruguay | 580 | 30 | Albania | 545 | 52 | Taiwan | 515 |
| 9 | Canada | 573 | 31 | Azerbaijan | 544 | 53 | Korea (DPR) | 509 |
| 10 | Latvia | 567 | 32 | Mexico | 542 | 54 | Mongolia | 508 |
| 11 | Philippines | 566 | 33 | Brazil | 542 | 55 | Macau | 505 |
| 12 | U.S.A | 566 | 34 | Pakistan | 541 | 56 | Japan | 504 |
| 13 | Nigeria | 566 | 35 | Venezuela | 541 | 57 | Myanmar | 498 |
| 14 | Netherlands Antilles | 565 | 36 | Former Yugoslavia | 540 | 58 | Congo | 496 |
| 15 | Bolivia | 565 | 37 | Ghana | 538 | 59 | Benin | 491 |
| 16 | Aruba | 564 | 38 | Malaysia | 535 | 60 | Angola | 489 |
| 17 | Argentina | 562 | 39 | Korea (ROK) | 533 | 61 | Mozambique | 487 |
| 18 | China | 559 | 40 | Vietnam | 530 | 62 | Togo | 477 |
| 19 | Italy | 558 | 41 | Gambia | 528 | 63 | Cambodia | 475 |
| 20 | Bosnia And Herzegovina | 558 | 42 | Haiti | 527 | 64 | Laos | 473 |
| 21 | Belarus | 558 | 43 | Kyrgyzstan | 525 | 65 | Mali | 446 |
| 22 | France | 557 | 44 | Indonesia | 525 | | | |

1999年度(1999年7月～2000年6月) 国別平均スコア【世界編】



(出典：国際教育交換協議会(CIEE) TOEFL 事業部ホームページ、ただし ETS-TOEFL Test and Score Data Summaryによる)

構 成

まとめ

資料集

- ① アンケート調査結果
英米文化学会会員の回答
高校教員の回答
- ② 『高校生の学力低下問題を検証する』
資料提供：学校法人 河合塾
- ③ 『就学率・進学率の推移』
資料提供：文部科学省
- ④ 『全世界の TOEIC IP 受験者に関する報告書 1997-1998』
資料提供：財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会

まとめ

昨今、大学1年生もしくは高校3年生の学力が低下・崩壊していると、大きな問題になっている。もともとは理数系の学力について問題視されていたのであるが、大学の先生方から英語についても同じことが言えるのではないかという指摘がいくつかある。

実際にどれくらいの数の先生方が、英語の学力の低下とお考えになっているのであろうかと、アンケート調査をした。その結果は右のとおりである。

本学会の242名の先生方について、回答者33名(回答率14%)中、25名(76%)が低下、1名(3%)が非低下、7名(21%)がどちらも言えないと感じている。低下の主な原因は、入試のレベル、英語学習の目的意識、などである。非低下については実際にレベルが数年同じであるからとうことである。また、どちらも言えない、という主な理由は、学校・学部によって低下・非低下、また英語の読み・書き・話す・聞くの4技能それぞれの技能によって低下・非低下である。この回答者の多くは大学・短大の先生方である。

| | 英米文化学会会員 | 非会員(高校教員) |
|---------------|----------|-----------|
| 対象数 | 242 | 32 |
| 回答数 | 33 | 11 |
| 回答率(%) | 14 | 34 |
| 無効解答数 | 1 | 0 |
| 有効回答数 | 33 | 11 |
| 有効回答率(%) | 14 | 34 |
| (1)ア:低下 | 25 | 5 |
| | 76% | 50% |
| (1)イ:非低下 | 1 | 2 |
| | 3% | 20% |
| (1)ウ:どちらも言えない | 7 | 4 |
| | 21% | 36% |

共愛学園の亀山先生のご協力により、一般の32名の高校の先生方に対しては、高校卒業時のレベルについて、同様のアンケート調査をした。回答者11名(回答率34%)中、5名(50%)が低下、2名(20%)が非低下、3名(36%)がどちらも言えないと感じている。非低下については、目的意識がはっきりしているからである。どちらも言えない、については学校差・4技能の個々の技能によって低下・非低下だからである。(資料①)

このアンケート調査は、現場の先生方の印象である。実際に、本当に英語の学力が下がったのであろうか。河合塾が、高校卒業後に河合塾に入ってくる生徒に受験させているクリニックテストの1995年と1997年の結果を比較して『高校生の学力低下問題を検証する』という報告をしている。それによれば、英語の学力について、本学会の実施したアンケート調査の(1)で「ウ:どちらも言えない」を選んだ先生方の指摘する理由とほぼ一致していて、分野ごとに低下・上昇と違った結果が出ている。「表現力—会話」では、コミュニケーション重視の現行課程の成果が現れて、学力は上昇している。「語彙力」は、その低下が著しい。「表現力—文法」については、知識の定着度が低くなってきている。「読解問題」については、大きな変化が観察されていない。(資料②)

本学会のアンケート回答者の大半が感じている「低下」の理由に、「語彙力」や「文法」の力不足が指摘されているが、この2点について注目すれば「低下」と考えることはできる。

一方で、少数ではあったが、コミュニケーション能力の上昇を認める回答もあった。「会話」の能力が上昇した、と考えることもできる。しかし、「定型表現」による「会話」である限り、コミュニケーションの限界があると思われる。

また、本学会のアンケート回答の中に、大学の合格率の上昇を指摘する声もある。文部省の平成13年度に発表した統計によれば、18歳人口が平成4年を境に、205万人(平成4年)から151万人(平成12年)に減少し続ける一方で、進学率が昭和51年から36%前後を横ばい状態であったところ、平成2年から、36.3%(平成2年)から49.1%(平成12年)に上昇している。大学入学時または高校卒業時の学力が低下しているのも認めざるを得ないのかもしれない。(資料③)

本学会のアンケートであげられた「英語の学力の低下・非低下・どちらとも言えない」に関する先生方の上げられた点は、河合塾の報告で教員の意見として上げられている点とほぼ一致している。

では、大卒の日本人の英語の学力は、巷に言われるように本当に低いのであろうか。財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会の発表した『国別 TOEIC 平均スコア』によれば、日本は 16 カ国の平均より下のようであるが、受験者数は第 2 位を大きく離して 1 位であるので、比較することは困難である。受験者数の少ない国においては、英語の学力の高い人たちだけが受験していると考えられる。一方で、日本は 80 万人以上の方が受験しているので、平均点は当然低く出る。また、協会の注にあるとおり、IP テスト（団体特別受験制度）なので、個人が自主的に受験する場合だけではなく、団体などから強制されて受験する場合も含まれているので、モチベーション等の相違が、平均点に如実に反映されているという点も考慮に入れなければならない。実際に、第 1 回～第 81 回公開テスト点は、これよりも 100 点位高い。（資料④）

本ワークショップでは、まず、「高校生の英語の学力が低下している」という点について、アンケートの回答と河合塾のデータを比較して現状を把握する。次に、せっかく伸びつつあるコミュニケーション能力を大切にしながらも、現行の学校英語を変えて行けるか、という点について参加者全員で考えたい。多種多様な見解が期待される。

資料①—大学(会員)

回答方法：葉書・ファックス・電子メールによる回答

- (1) 大学1年生の英語力が低下していると思いますか。
ア 思う イ 思わない ウ どちらとも言えない。
- (2) その理由を、できれば具体例をあげて教えてください。
- (3) 上記(1)で「思う」とお答えになった方にお尋ねします。何年前と比較して低下した、と思われるか？
- (4) その他、コメントがありましたら、以下にご記入ください。

回答 33件(14%)

- (1) 大学1年生の英語力が低下していると思いますか。
ア 思う 25件(76%) イ 思わない 1件(3%)
ウ どちらとも言えない。 7件(21%)
- (2) その理由を、できれば具体例をあげて教えてください。
 - (1) で「思う」と答えた人の理由
 - [1] dead と die をまちがえるなど品詞の区別ができない。
 - [2] 中学生用の多くの英語教科書の内容変化、読む文の量の減少と平易化などによる基礎力の低下。
 - [3] 英文を書かせた時に基本的な間違いが多いと思います。
 - [4] 短めの簡単な作文でも、基本文型(S+V+...) で書けていなかったり、過去形にすべきところをしていなかったり、というものが目立つようになってきた。
 - [5] 中・高での英語の授業時間の減少。大学入試に競争する必要がなくなったこと(ごく一部を除いて)
 - [6] 某大学の教員の話では、第二外国語ですら英語バナレが激しく、高校で文法をしこまれていないので、学生自らができない英語を努力しようとせず、英語をとらないですむ中国語を選択する傾向がはなはだしいのが最近の傾向。英文科以外では、第一外国語も英語をとらない生徒が多い。
 - [7] 英語が入試課目からはずれた。
中学段階の基礎が入っていないまま、高校3年間の積み重ねがほとんど見られない。入試がきびしい時代はここで取り返せたが、今は推せんその他入試が多様化し、きびしい勉強をしなくても大学に入ってきてしまっている。
 - [8] 1994年度以来行っている基礎力習熟度テスト(中学内容)で'94年度・平均正答率73%最低42%(1名)が2000年度平均47.8%最低25%
 - [9] 読解力が弱い学生が多い。
 - [10] 基礎的単語がまるでわかっていない
 - [11] ・簡単な英文が訳せない。
・Writingも文法がきちんとできていないため、簡単な文も書けない。
 - [12] 社会のバブル化、教育のバブル化、「競争」をきらう。学問の楽しさを教えない。親や社会が教師を低く見る。文部省指導要領の内容低下。教育以前の問題が大過ぎる。秀才が結婚しないか、余り子供を生まない。etc.
 - [13] 簡単な英語の疑問文すら正確に書ける学生が少なくなっている。
 - [14] ゆとりある教育の弊害
 - [15] a) 読解力 □ 特に □ 語彙力、□ 実用的な文法力を基礎として、文を構造的に理解していく力に欠けているように思います。
b) 音声の大切さを理解している学生が減少しているように思われます。
 - [16] 複雑な英文の読解力が落ちています
 - [17] 英語だけの問題ではない。
何か1科目でも意欲があればと思う。
衣食足りて礼節を知らなくなったのは大人の責任。
 - [18] 受験(入試)英語<これが本質的問題>がマイナスに作用している。生きた英語の視点が重要と考えます。

[19] 同じ教科書を使っているクラスだと、以前の学生が辞書や教師の助けなしに理解できていたレベルのものを最近の学生は自力で理解できない。語彙力が低下しているので辞書をひくのに時間がかかり、時間がかかるから面倒でますます予習・自習をしないという悪循環のようである。又、簡単な文法用語、例えば各品詞の名前、などがわからないという学生が増えてきている。そのため英文を演繹的に生産的に作ることができない。いずれも中学・高校での英語の授業数が減ったことによる練習不足、慣れ不足と、コミュニケーション重視とやらで文法的知識を問わなくなったこととに起因するように思われる。両者はあきらかに矛盾しているように見えるが、。。。(あくまで私見です。)

[20] 受験(入試)英語<これが本質的問題>がマイナスに作用している。生きた英語の視点が重要と考えます。

[21] 以前使った教材が難しすぎて使えなくなった。文の分析能力がないため、文意を把握することができない学生が増えた。読解だけでなくそのほかの英語力も中学程度の基本的なところが身に付いていない。単語力が不足しているため、ディクテーションをしても、文脈に沿わない解答を書いてしまう。

[22] 文法の基礎知識がなくて英文が理解できない。

[23] 使用されている教科書において、文法が軽視されていること。

[24] 英語購読、英会話、英作文などの教科を担当していて、英語の基礎力がついていないと思われる学生の割合が増えた。

例えば、某大学の英文科の学生で英文の意味をとることはもとより、音読や単語のスペリングに自信のない者がかなりみうけられる。明らかに中学レベルと思われる英語力がしっかり身につけていない。

[25] 無回答

(1) で「思わない」と答えた人の理由

[1] 特に大学1年の英語力が低下していると思えない。近年ずっと同程度だと思う。

(1) で「どちらとも言えない」と答えた人の理由

[1] 複数の学校で教えています。学校によっては、同じ学年、同じ学部で教えても、5年前とはガクンと落ちていることもありますし、別の学校では、数年前よりできると感じることもあります。

[2] 私の場合、夜間部で、一般教養の英語(選択)を担当しており、中間部の学生については、わかりません。夜間部の場合、実力の落差が大きい様に思います。

[3] 学部・学科によって(あるいは大学によって)低下していると感じるクラスもあれば そうでない所もある。

[4] 学校間で差があるので(ある学校では英語力があがり、また別の学校では下がるという感じ)

[5] 英語力を、いわゆる読解力とするか会話力とするかで結局は、一方は横ばい状態、他方はゆるやかながら上昇又は現状維持などとなるかと予想(測)されるので。

[6] 教育実習に来る大学生(英語専攻)はまあ「並」というところだが、「国際〇×専攻」の学生は、日常会話もアブナイ、という場合がある。社会生活の面で、実習期間中指導を要することが年々増えている。Generation Gapの問題だけではないような気がする。

[7] 毎年4月にプレイスメントテスト(同一問題で)を実施しているが、高得点の学生は毎年同数ぐらいはいる。しかし、極端に得点の少ない学生の数が急増している。

(3) 上記(1)で「思う」とお答えになった方にお尋ねします。何年前と比較して低下した、と思われるますか?

(1) で「思う」と答えた人の回答

[1] 1年前 [2] 2年前 [3] 3年前から特に [4] 3~4年前 2件

[5] 5年前 [6] 5~6年前 [7] 6年前 2件 [8] 6~7年前(でしょうか?)

[9] 約10年前 [10] 10年前 4件 [11] 10年~13年前

[12] 12年前 同じテキストを使ったので明確です。

[13] 30年前 [14] 無回答 2件

[15] 5年前からじょじょに。特にここ2・3年が著しい。

[16] 8年前ぐらいから毎年低下し続けている

[17] 低下が階段のように明確に痕跡が現れていないので、断言できない。

私の予備校の体験を踏まえれば、約20年前位です。

[18] 短大で教えているが、学力は年々目に見えて低下している。

しかしながら、低下しているのは英語だけではない。

[19] 5年前、さらに10年前と比較すると、もっと低下している。

- (1) で「思わない」と答えた人の回答---無回答
 (1) で「どちらとも言えない」と答えた人の回答---無回答
 (4) その他、コメントがありましたら、以下にご記入ください。
- (1) で「思う」と答えた人のコメント
- [1]無回答 6件
- [2] 結局一番効果的なのは、カナダや東欧が行っているイマージョン・プログラムではないでしょうか。
- [3] 大学入試の英語のハードルをしっかりと設定して、それをクリアーできる者だけが入学できるという(夢のような)体制がなければ、今後、ますます英語力は落ちてくる。
- [4] 英語力の低下には、電子辞書で単語の暗記が不要、文法の授業のレベルが低下が上げられている。
- [5] 毎年あきらかに低下し続けている。この傾向はとくにここ3~4年顕著である。一般に予習をするという勉強態度ができていない。構造をきちんと把握するという姿勢がない。日本語の「テニオハ」が身につけていない。なんとなくダラッとしていい加減に日常を過ごしている、という今の若い人達の生活態度がきわめて悪い影響を及ぼしている。
- [6] 2000年度 136名中 80%以上1名、50%以下 81名。進学者の大学選択の幅が広がったこと(4年制大学を含め)、動機付けが困難、「現在の享楽志向」の拡大等が主な原因と思われる。
- [7] 学力の低い生徒は入学させるべきではない。
- [8] 5年前にはじめて授業を担当して以来、どんどん低下している。
- [9] 年々低下していきます。中高の英語教育はどうなっているのかと思います。あまり Communication に重きをおきすぎて基礎がきちんとできていない学生がめだちます。昔ながらのきちんと英語を読み・訳すことが必要です。
- [10] 短大でも教えているが、ここでの学力低下は著しい。中学1・2年生の学力(英語)で stop していると言っても良いかもしれない。中高6年間何を学んできたのか、といつも疑問に思う。落ちこぼれをつくらぬような対策が必要だと感じる。
- [11] 英語を使う機会がない
- [12] 大学の非常勤になって、(中)-高-大の連学が如何に難しいことが分かりました。
- [13] 4技能のバランスの点からみれば、リスニング力がやや向上しているので平均化の方向に向かいつつあると思えます。
- [14] 物があまりにも豊かで Hungry 精神をもちうにも持てない。
 単位制度にも問題がある。もっと厳しくすべきでは?
- [15] ゼミによる3~5名の少人数による基礎の学習、(文法も含め)充実も一方法と考えられる。
- [16]無効 1件
- [17] 大学1年生の英語力低下よりも、大学2年生、3年生と学年が上がるに従い英語力が急激に低下していくという現象のほうが深刻ではないかと個人的には思います。大学1年生の場合原因は大学外のところで作られていることもあり、改善策に限られてきます。大学における英語教育についてに焦点を合わせるなら大学内の比較をしないといけないのでは?
- [18] 以前は大学に行かなかったような、中学、高校時代に落ちこぼれてしまった学生が大学生になってしまったり、入試に英語がいらぬ科もあるためと思われる。中学1・2年程度の基礎的な英語力(特に文法)、中学時代に徹底的に身につけさせるよう教師が努力すべきだと思う。
- [19] 英語力の低下は、何を基準にして判断するかに依りますが、総論的に言えば、英語教育の国の方針が揺らいだ結果と 思います。
- [20] 電子辞書・コンピュータの辞書などの普及により、学生は前よりは辞書を引くようになってきている。しっかりとソフトであれば、積極的に使わせるべきであると思われる。

[2] 高校卒業までに当然習得していると思われる英文法事項やボキャブラリーが役立つ言語力として定着していないため、基礎力を土台にしてより自由に使いこなせる英語力の習得をめざそうとする際、また大学レベルにふさわしい平易だが内容のより高度な教材や授業内容を用いた授業計画を実施しようとする際、目標とするレベルを落とさざるを得ないことが多くなった。そのため大学の英語ではなく、中学や高校の英語学習の復習を内容を変えて実施しているのではないかと自己嫌悪に陥ることがあり、さらにひどい場合は、中学生に教えているような気分になることもある。実際教室で学生に教えていると、学生の英語学力不足に直面し、レベルを下げざるを得ない。

また特に英語力の劣る学生が足を引っ張って、授業内容の変更を余儀なくさせられるが、近年その英語力の特に劣る学生の割合が増えている。特に中学時代に英語の授業について行けずにあきらめてしまったのではないかとと思われるような初歩的な学力のない学生が、大学に入学してきて英語を必修科目で履修させられている現状があり、対応に苦慮している。

(1)で「思わない」と答えた人のコメント—無効

(1)で「どちらとも言えない」と答えた人のコメント

[1] やはり、経営の都合上から、志望者減少のために入学者のハードルを低くせざるを得ない学校では、英語力の低下は顕著かと思えます。

[2] 全体として英語力というよりは日本語の能力がととも低下していると感じる。また、一般常識がいちじるしく欠けてきていると思う。(この5年位でとても低下した)

[3] 「英語力の低下」がいわれる一方で、英検はじめ各種の資格試験に対する意欲も相かわらず一定のものがある現状では、どの分野のデータを用いるかによって結果も自ずとちがったものになってくるかと思えます。

[4] 力のついている学生と、全然力のない学生(高校まで何をやってきたかと疑うような)が増えている。これは一般入試以外のAOなどで入学数が増えているからではないか。ボキャブラリーが信じられないぐらいにないことも、この頃の傾向と思われる。暗記を軽視する風潮ではないのか。

[5]無回答 2件

資料①－高校（非会員）

回答方法：封書による回答

(4) 高校卒業時の英語力が低下していると思いますか。

ア 思う イ 思わない ウ どちらとも言えない。

(2) その理由を、できれば具体例をあげて教えてください。

(3) 上記(1)で「思う」とお答えになった方にお尋ねします。何年前と比較して低下した、と思われませんか？

(4) その他、コメントがありましたら、以下にご記入ください。

回答 11件（回答率34%）

(4) 高校卒業時の英語力が低下していると思いますか。

ア 思う 5件(50%) イ 思わない 2件(20%)

ウ どちらとも言えない。 4件(36%)

(2) その理由を、できれば具体例をあげて教えてください。

(1)で「思う」と答えた人の理由

[1] 1. 語彙力の低下…継続的に学習する習慣が身に付いていない昨今の状況では一番大きな要因である。

2. 高校生の資質そのものの変化…外国語の修得は自律的学習が不可欠であるにもかかわらず、自律性を欠いた高校生が多い今日の状況では当然の理由である。

[2] 「英語」以前の「日本語」の問題であると感じております。

文章を読めない、読まない、生徒が多い。

[3] ・高校卒業時でも、基本的な動詞の活用（過去形など）を間違える生徒の割合が増えている。その根本原因の一つとして、中学における基本事項の定着が十分なされてきていないことがあげられる。

中学時代における、文法の体系が身に付いていないため、高校に入ってから苦勞し、高校在学中も伸び悩むことが多い。

[4] ・読解力、文法的知識、英作文の力など（Readingや音声面はよくなっている）

・辞書を引くことをしない。（電子辞書などで済ませている）

・ノートを取らない。（授業中大事なことを板書しても写そうとしない。ノートを持っていない者もいる）

・英語の予習をしない。

・筆記体での板書は読めない。

[5] 中学校において、communicative な力を重視するようになって久しいが、そのために、感覚的・気分的に単語を並べるだけの生徒が増えていると思う。もちろん communicative な力を重視する授業をやっても基本的な文の組み立てをきちんと身に付けている生徒もいるが、かなりの割合の生徒が英文の語順が分かっていない。

(1)で「思わない」と答えた人の理由

[1] 中学校で学ばない項目を高校で学ぶため、押し上げられて高校英語が圧迫されており、不消化のままであるため。

[2] これまで指導してきた生徒が受験生ばかりであったため、意欲があり、高度な文法力・読解力・作文力があつたと感じてきましたので。

(1)で「どちらとも言えない」と答えた人の理由

[1] 私の勤務する高校は英語を中心とした外国語に関する科目を多くカリキュラムに取り入れた特別な学校です。生徒も外国語（英語）を学びたいという意欲をもった者が多く、アンケートの答としてはあまり参考にならないかもしれません。

[2] 読む英語から 話す、聞く英語へと時代の教育の流れがあるので、確かに語力とか読書量の不足はあるが、聞いて話す力は確実に伸びてきているように思われる。マスメディア等の発達が大いに影響していると思う。

[3] 兵庫県で行われているテストに毎年参加している結果です。

| H10 卒業生 | H11 卒業生 | H12 卒業生 | H13 卒業生 |
|-------------------|--------------------|---------------------|---------------------|
| 1 年次(H8)→2 年次(H9) | 1 年次(H9)→2 年次(H10) | 1 年次(H10)→2 年次(H11) | 1 年次(H11)→2 年次(H12) |
| 英語科 49.6→51.8 | 英語科 47.2→47.3 | 英語科 49.9→47.9 | 英語科 50.1→52.1 |
| 普通科 50.1→49.4 | 普通科 50.0→47.6 | 普通科 50.8→47.4 | 普通科 52.2→49.3 |

[4] 生徒の英語力が二極化していると思える。具体的に言うと、日本で生まれて育った者でも高2で英検準1級を取得する者がいたり、高3でも、3級を取得できない者もいる。

(4) 上記(1)で「思う」とお答えになった方にお尋ねします。何年前と比較して低下した、と思われますか？

(1)で「思う」と答えた人の回答

[1] 10年前と比較して [2] 年毎に [3] 5～6年前

[4] 3年くらい。ただし年々生徒の力が落ちていくような気がする。

[5] はっきり何年くらい前とは言えない。

(1)で「思わない」と答えた人の回答

[1] 5年前から以前

(1)で「どちらとも言えない」と答えた人の回答

[1] 私個人として6年間この学校に勤務していますが、当初より読解力と作文力において低下している気がしていますが、10年勤務する先生は「たいして差はない」と言っていました。

[2] 我が高では3年前

[3] 無回答 1件

[4] 無効 1件

(4) その他、コメントがありましたら、以下にご記入ください。

(1)で「思う」と答えた人のコメント

[1] 個人的に感じているのは、高校におけるカリキュラムの大幅な改革である。英語と言っても色々な側面があり、教養(実技)を中心とした科目と学問(文学、科学など)を中心とした科目の区別をはっきりとし、生徒が個々のニーズに合わせて自由に選択できるべきだと思う。

[2] ・指導要領の改訂により、中学生の英語の力がおちている。

・入試制度の改革により、英語の力のないものが高校へ入ってくる。

つまり推薦入試などにより学力がなくても高校へ入ってくる。

・大学入試も入りやすくなったため、生徒は熱心に勉強しなくなった。

・最近の若い教師は英語の力が、特に Speaking や Hearing の力があると思う。

ただし根気強く読もうとしない。

[3] communicative と文法説明とは決して対立するものではなく、どちらか一方だけやるというものでもないと思うが、今、英語教育において文法説明など罪悪であるかのような風潮さえある。このままでは一部能力ある生徒以外、「買い物 English」「チーチーパッパ English」しかできなくなる。

(1)で「思わない」と答えた人のコメント

[1] 原因はいろいろ考えられます。

オーラルコミュニケーションに徹すればするほど、以前の英語力は衰えていると思われるが、新しいコミュニケーション力が増えていっているとは言える。しかし、目に見える形で英語力の低下、又上昇を表されたものを見ていない。

(1)で「どちらとも言えない」と答えた人のコメント

[1] 学力の低い生徒達が多い学校にいますので、意見には偏りがあるかもしれませんが。しかし難解な英文を読みこなすよりも、楽しく学習していける方法もあるということが、学習の助けになっています。

[2] 中学の英語の内容がやさしくなってきた感じがして、1年次の4月・5月の授業で生徒がどの位の学力を持ちあわせているか把握するのに苦労します。

高校生の学力低下問題を検証する

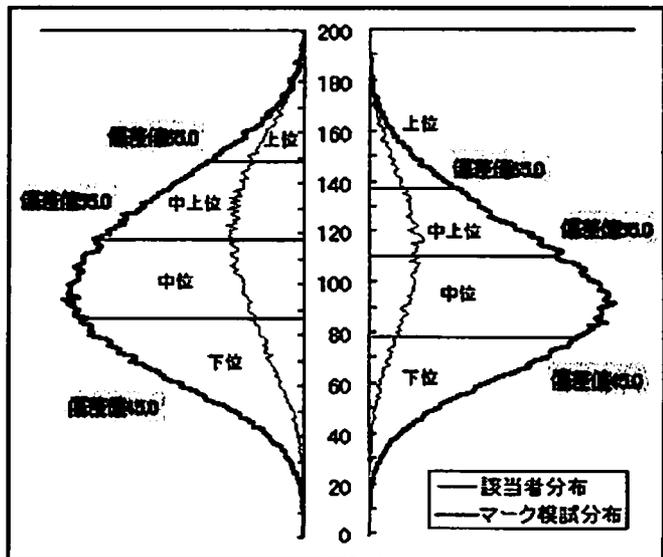
教育課程が改訂されるごとにその内容が削減され、生徒の学力が著しく低下しているのではないかという議論が、折に触れて目につくようになってきた。文部省でも客観的なデータを持っていないために、2001年度より10万人規模の小中高生を対象とした本格的な調査に乗り出すことを決定している。そこで、河合塾としても、全国的な模擬試験や河合塾内の生徒に対する試験の結果など、独自のデータを用いて受験生の学力の変化の実態を調査・分析した。

- | | |
|---|--|
| <p>1. <u>調査の概要</u></p> <p>2. <u>調査の結果</u></p> <ul style="list-style-type: none"> □ 全体的傾向 □ 英語の傾向 □ 数学の傾向 □ 国語（現代文・古文）の傾向 □ 理科（理系の物理・科学）の傾向 □ 地歴（世界史・日本史）の傾向 | <p>3. <u>高校の先生の見解</u></p> <p>4. <u>まとめ</u></p> |
|---|--|

1. 調査の概要

河合塾には、高校を卒業して河合塾に入ってきた生徒が4月初旬に受験する学力クリニックテストがあり、その中には河合塾生の学力の変化を把握するために経年的に共通の問題が出題してある。そこで、旧課程最後の学年であった95年度の生徒と今年度の生徒が受験したクリニックテストの中から共通問題を抽出し、比較検討してみることにした。

それぞれの年度の第1回全統マーク模試の偏差値帯別に受験生を4つのグループに分け（資料1参照）、グループごとに正答率を再集計した。河合塾の生徒の成績を単純に比較するのではなく、20数万人規模の高校生・浪人生が受験する全国規模の模擬試験をベースにグループを設定することによって、全国的な位置づけでの学力比較を行うことが可能になる。各グループのサンプルとして河合塾生が代表になる形で、4グループの各学力層同士の学力比較を、クリニックテストにおける共通問題の正答率を用いて試みるという手法である。



資料1 第1回全統マーク模試国語得点分布

2. 調査の結果

全体的傾向

今回調査対象とした科目は、英語、数学（文系生・理系生）、現代文、古文、物理（理系生）、化学（理系生）、世界史、日本史の8科目で、各科目のグループ別正答率の変化は資料2の通り。

この表からわかるように、全体的に正答率は下がっている。教育課程の変化とともに、少子化により大学入試が易しくなり入試プレッシャーが下がったことが、生徒の学習の質と量に大きな影響を及ぼしていることが伺われる。

学力レベル別に見ると、難関大学をめざす上位層では学力低下の度合いは少なく、分野によっては上がっているところもある。一方、入試プレッシャーの緩む中位・中上位での学力低下は大きいようである。また、下位層であまり正答率が下がっていないのは、95年度の時点ですでに正答率が低く、いわば下げ止まり状態にあるためだと考えられる。いずれにせよ、学力レベル別に見た場合には、上位と下位への二極分化が起こっていると言えそうである。

教科別に見ていくと、英語・国語などの言語系科目の正答率は微減程度だが、数学・物理など理数系科目での正答率が大きく低下しているのが目につく。以下、各教科でどのような学力変化が起きているのかを具体的に見ていくことにしよう。

| 教科名 | 上位 | | | 中上位 | | | 中位 | | | 下位 | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|--------|-------|-------|--------|
| | 95年度 | 99年度 | 差 | 95年度 | 99年度 | 差 | 95年度 | 99年度 | 差 | 95年度 | 99年度 | 差 |
| 英語 | 74.5% | 73.8% | -0.6% | 61.1% | 59.8% | 1.3% | 47.7% | 46.5% | -1.2% | 35.4% | 34.3% | -1.1% |
| 数学(理) | 84.5% | 81.5% | -3.0% | 71.0% | 62.0% | 9.0% | 57.0% | 41.7% | -15.3% | 37.2% | 21.5% | -15.6% |
| 数学(文) | 85.6% | 86.1% | 0.5% | 74.8% | 66.1% | 8.7% | 61.3% | 42.3% | -19.0% | 37.8% | 21.1% | -16.7% |
| 現代文 | 66.9% | 66.7% | -0.3% | 58.2% | 58.3% | 0.2% | 49.1% | 49.8% | 0.7% | 39.9% | 41.2% | 1.3% |
| 古文 | 57.3% | 54.6% | -2.7% | 46.3% | 45.2% | 1.1% | 37.6% | 37.1% | -0.6% | 30.7% | 30.6% | -0.1% |
| 物理(理) | 64.7% | 61.3% | -3.4% | 50.8% | 43.5% | 7.3% | 37.5% | 33.0% | -4.5% | 26.5% | 25.4% | -1.1% |
| 化学(理) | 84.5% | 84.2% | -0.3% | 69.3% | 68.8% | 0.5% | 52.3% | 52.3% | 0.0% | 37.6% | 36.4% | -1.2% |
| 世界史 | 75.9% | 74.3% | -1.6% | 61.0% | 58.5% | 2.5% | 45.2% | 44.0% | -1.1% | 33.4% | 32.9% | -0.6% |
| 日本史 | 69.3% | 64.0% | -5.3% | 53.7% | 47.7% | 6.1% | 39.8% | 35.4% | -4.4% | 30.6% | 27.9% | -2.6% |

[上位]全統マーク模試偏差値 65.0 以上

[中上位]全統マーク模試偏差値 55.0～64.9

[中位]全統マーク模試偏差値 45.0～54.9

[下位]全統マーク模試偏差値 44.9 以下

資料2 クリニックテスト（共通問題）に見る正答率の<科目別>

1. 調査の結果

英語の傾向

英語全体としては正答率がわずかに下がった程度で大きな変化はない（資料3参照）。ただし、分野ごとに見ていくといくつかの傾向が見られるようである。

「表現力-会話」は、会話形式の空所補充問題で、会話文中の空欄に当てはまる文章を選ぶ問題。設問の中には文法・語法の知識を要するものも含まれており、そういった設問では正答率が低下しているが、問題例1、問題例2のように、設定された状況の中で決まった言い回しをする定形表現の問題は、はっきりと正答率が上昇している。コミュニケーション能力を重視する現行課程の教育成果が現れていると言えよう。しかし、定形的な会話表現力がアップしている一方で、語い・文法・語法を試す問題の正答率が下がっていることが気になるところである。

「語彙力」は、易から難まで難易度別に分類された英単語の意味を問う問題である。ここで注目すべき点は、上位・中上位層でも、語いレベルが上がるに伴い正答率の低下が著しいということである。上位の生徒でも難易度が高い語いの対策はあまりできていないと考えざるを得ない。

「表現力-文法」は、文章中の空所に適語を補う問題、「表現力-作文」は日本文の意味に合うように与えられた語句を並べ替える問題だ。こうした文法・語法の知識が必要となる問題では、従来なら入試対策の中で身につけることができていた知識の定着度が低くなってきているようである（問題例3、問題例4参照）。読解問題については、今回の調査からはさほど大きな変化が読みとれなかった。

| 分野名 | 上位 | | | 中上位 | | | 中位 | | | 下位 | | |
|------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | 95年度 | 99年度 | 差 |
| 英語全体 | 74.5% | 73.8% | -0.6% | 61.1% | 59.8% | -1.3% | 47.7% | 46.5% | -1.2% | 35.4% | 34.3% | -1.1% |
| 語彙力 | 71.8% | 70.6% | -1.2% | 58.7% | 57.1% | -1.6% | 45.9% | 44.7% | -1.2% | 34.2% | 33.3% | -0.9% |
| 表現力-会話 | 82.2% | 84.7% | 2.5% | 70.3% | 72.2% | 2.0% | 58.0% | 59.7% | 1.7% | 46.7% | 47.8% | 1.1% |
| 表現力-作文 | 78.2% | 77.0% | -1.2% | 65.3% | 63.0% | -2.3% | 48.6% | 46.0% | -2.6% | 32.0% | 29.7% | -2.3% |
| 表現力-文法 | 74.7% | 73.5% | -1.2% | 62.5% | 60.7% | -1.9% | 50.2% | 48.3% | -1.9% | 37.9% | 35.9% | -2.0% |
| 読解力-短文内容把握 | 68.9% | 70.1% | 1.2% | 54.1% | 54.3% | 0.1% | 41.9% | 40.7% | -1.2% | 30.5% | 29.1% | -1.4% |
| 読解力-中文内容把握 | 84.9% | 84.8% | -0.1% | 70.8% | 68.8% | -1.9% | 52.4% | 50.3% | -2.1% | 37.8% | 36.2% | -1.6% |
| 読解力-長文内容把握 | 70.2% | 69.9% | -0.3% | 47.2% | 46.2% | -1.0% | 33.6% | 33.2% | -0.4% | 26.2% | 26.1% | -0.1% |

資料3 クリニックテスト（共通問題）に見る正答率の<英語>

問題例 1

問 5 A : Good morning. May I help you ?

B :

- (イ) A bit too expensive.
- (ロ) Don't mention it.
- (ハ) How do you like them ?
- (ニ) Thank you, I'm just looking around.

解答 : (ニ)

| | 正答率 | | | |
|------|-------|-------|-------|-------|
| | 上位 | 中上位 | 中位 | 下位 |
| 95年度 | 85.1% | 73.0% | 65.9% | 64.9% |
| 99年度 | 91.8% | 80.4% | 74.0% | 69.0% |
| UP | 6.7% | 7.4% | 8.1% | 4.1% |

問題例 2

問 1 A : It's getting late. I have to go now. Bye !

B :

- (イ) Oh, are you ?
- (ロ) See you.
- (ハ) How do you do ?
- (ニ) Far from it.

解答 : (ロ)

| | 正答率 | | | |
|------|-------|-------|-------|-------|
| | 上位 | 中上位 | 中位 | 下位 |
| 95年度 | 93.5% | 89.1% | 80.9% | 73.0% |
| 99年度 | 96.4% | 91.5% | 86.5% | 79.0% |
| UP | 2.9% | 2.4% | 5.6% | 6.0% |

問題例 3

問13 It is no 53 trying to advise her.

(イ) good (ロ) matter (ハ) well (ニ) point

解答：(イ)

| | 正答率 | | | |
|------|-------|-------|-------|-------|
| | 上位 | 中上位 | 中位 | 下位 |
| 95年度 | 69.2% | 52.7% | 40.0% | 27.1% |
| 99年度 | 60.0% | 43.2% | 31.4% | 23.3% |
| DOWN | -9.2% | -9.5% | -8.6% | -3.8% |

問題例 4

問7 彼の発言はその問題とほとんど関係がない。

His remarks () (23) () (24) () the subject.

(イ) do (ロ) little (ハ) have (ニ) with (ホ) to

解答：have little to do with
(ロ) (イ)

| | 正答率 | | | |
|------|-------|-------|--------|-------|
| | 上位 | 中上位 | 中位 | 下位 |
| 95年度 | 87.8% | 74.3% | 54.6% | 33.4% |
| 99年度 | 85.3% | 65.4% | 44.0% | 24.7% |
| DOWN | -2.5% | -8.9% | -10.6% | -8.7% |

3.高校の先生の見解

最後に、本テーマで研究報告会を実施した際に、高校の先生方からいただいたアンケートの集計結果を紹介する。

「担当教科における生徒の学力低下を感じますか？」という質問に対して 88%の先生が「感じる」という回答であった。特に数学でその比率が高く、実に 97%の先生が学力低下を感じているという結果となった(資料8参照)。

次に、「具体的に学力低下を感じる点とその要因」については、資料9のようにさまざまな意見をいただいた。英語や国語の先生からは語彙力の低下を指摘する声が多く、数学の先生は現行課程のカリキュラムの問題と生徒の計算力不足を挙げている。また、自然現象の背後にある法則を扱う理科の先生からは、自然現象そのものに触れる体験の欠落と興味・関心の欠如が指摘され、地理歴史の先生は、最近の生徒が事件や事象の意味や因果関係を考えなくなっていることが問題とされているようである。

また、従来に比べ意欲、粘り強さ、好奇心、論理的な思考、落ち着きが無くなってきているなど、生徒の気質の変化を指摘する声も多かった。受験プレッシャーが緩み、自然体験や社会体験など生徒自身の実体験が乏しくなっていく中で、生徒の生活スタイル、学習スタイルは大きく変化し、従来の常識が通用しなくなっていることが、アンケートの結果からも読みとることができる。

資料8 高校の先生へのアンケート結果

Q: 担当教科に関する生徒の「学力低下」を感じますか

| 教科 | 回答数 | | | 割合 | | |
|--------|-----|--------|---------|-----|--------|---------|
| | 感じる | 特に感じない | よくわからない | 感じる | 特に感じない | よくわからない |
| 英語 | 58 | 6 | 1 | 89% | 9% | 2% |
| 数学 | 59 | 2 | 0 | 97% | 3% | 0% |
| 国語 | 49 | 6 | 1 | 88% | 11% | 2% |
| 理科 | 30 | 2 | 3 | 86% | 6% | 9% |
| 地歴・公民 | 49 | 6 | 1 | 88% | 11% | 2% |
| 不明・その他 | 14 | 5 | 1 | 70% | 25% | 5% |
| 合計 | 259 | 27 | 7 | 88% | 9% | 2% |

* 10/18 現在 (東京、横浜、水戸、立川、岐阜会場) の集計

資料9 具体的に学力低下を感じる点とその要因 (先生の意見)

| | |
|------|--|
| 英語 | 英文和訳で訳した日本語の意味を質問されることがある。 単語力、文法力が著しく低下しているようです。 ひらがなの多用 (漢字で書けない) 考えながら自分のものにする姿勢が顕著に低下。英和辞書で単語を調べてもそこにある訳語をそのまま使うことしかできぬ生徒が増加。 |
| 数学 | 不自然な流れが理解をかえって難しくしている。 多くの分野で教える内容が中途半端なので、その結果、定着・応用が少ない。 分数、四則計算ができない。 |
| 国語 | 文化的、社会生活的常識と思われることが著しく欠けてきた。 選んだり、バランスをとったりすることについては上手くなったが、現国などで深くつっこんでつめていくこと、考え続けることができない。 学習意欲の低下。古文・漢文などの文法事項が何度やっても定着しない。 誤字、又は語句の誤用が多い。 語彙がなさすぎて読解ができない。比喩や抽象語についていけない。 |
| 物理 | 数学力がない。グラフ・ベクトル・三角関数等を数学とは別に改めて物理の授業で伝えなければならない。 |
| 化学 | 化学の問題を解くに当たり、数学的能力が低い。手際よく式を立てられない。指数・対数計算ができない。 |
| 生物 | 知的バックグラウンドの不足。知的好奇心の欠如。「論理性」のおもしろさを持つものが少ない。 学力以前に身の回りの現象に対する興味・関心・経験が減ってきていると思われる。 |
| 世界史 | 定期試験前に用語などをただ暗記することにつとめ、その流れや意義を問わない。 |
| 日本史 | 日本史の基本語句や時代の配列が全くわかっていない。小中学校で歴史をやったのだろうかと思われる。 歴史的事件の原因や影響について考察する力が、以前と比較して低下している。 |
| 生徒気質 | 自分から求めることができない。すべてセットになって与えられるものと考えている生徒が多くなった。 生徒自身の学習に対する意欲が見られず、学習の時間が少ない。 粘り強く考える生徒が減っているのは確かである。 自力で解決しようとする姿勢があまりない。すぐにマニュアルを欲しがる。 やはり受験プレッシャーの低下が一番の原因と思われる。学習意欲、学習量の低下が見られる。 |

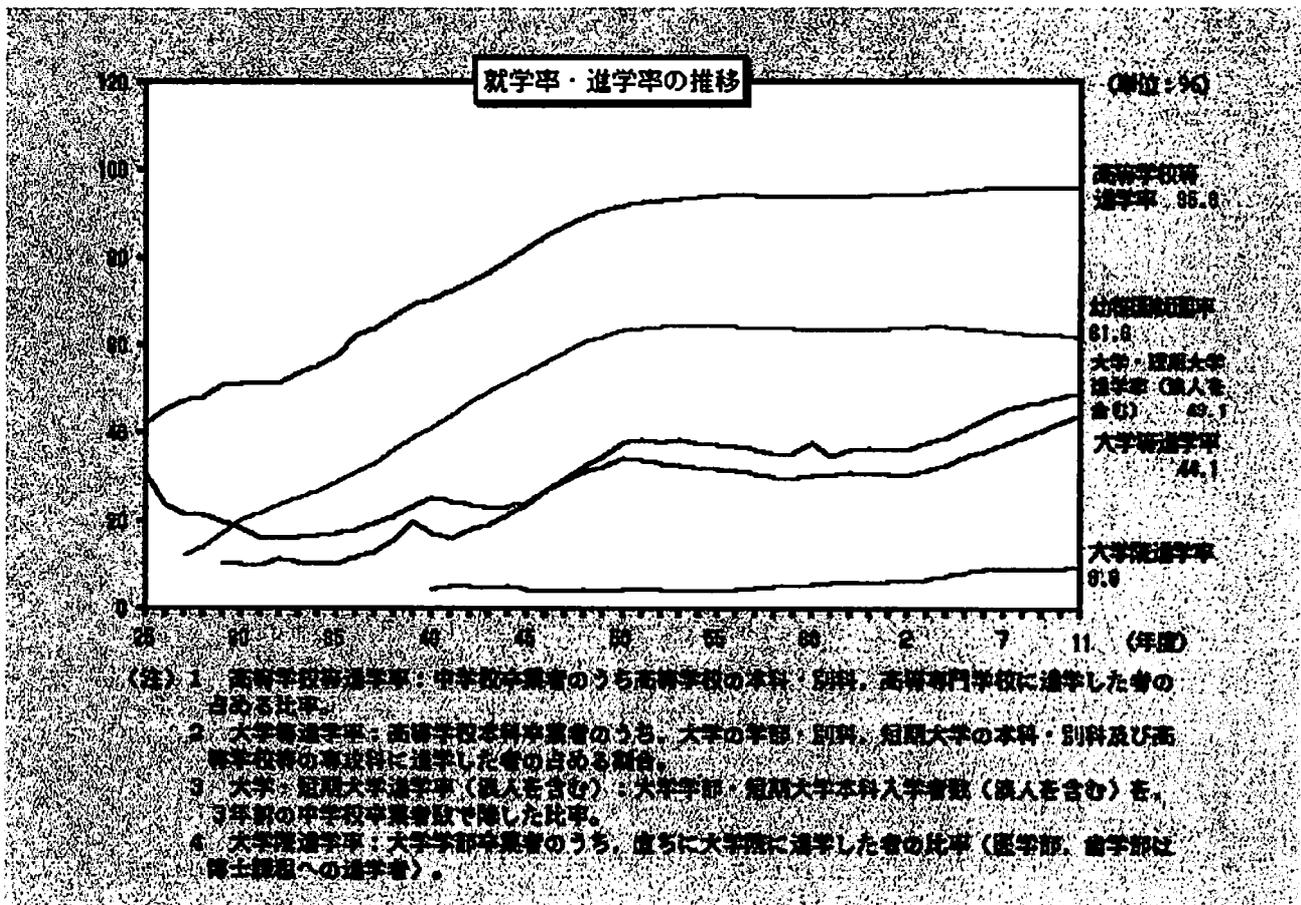
4. まとめ

今回、テスト問題の正答率変化から行った検証の結果、“問題を解く力”という意味での「学力」は、やはり下がっているといわざるを得ないであろう。教育課程の改訂に伴う内容の厳選に伴って、「学力」が下がることは当然の帰結である。

戦後一貫して伸びてきた高校・大学進学率は、良くも悪くも入試プレッシャーをひとつの重要な学習の動機付けとしてきた。近年の少子化による受験プレッシャー低化の中で、子ども達は何を学習の動機付けとしてどのような学力を身に付けていくべきなのか、そしてこの学力低下問題をどう捕らえ、どう対応するべきなのか。これは、2003年度からの新教育課程の高等学校導入を前にして、我々に投げかけられた根本的な問いかけなのである。

資料③

資料提供：文部科学省





Report on Test-Takers Worldwide 1997-1998

全世界の TOEIC IP 受験者に関する報告書 1997-1998

注) これは、The Chauncey Group International Ltd. が作成した「Report on Test-Takers Worldwide 1997-1998」を IIBC が邦訳したものからの抜粋です。

以下のページに提示されている各種データは 1997 年と 1998 年に全世界で実施された IP* (Institutional Program、団体特別受験制度) のデータ 2 年分を合算したものであり、公開テストのデータは含まれておりません。

*IP 制度についての詳細は、TOEIC ホームページの「法人向け情報」内の「団体特別受験制度」のページをご覧ください。

TOEIC バックグラウンドアンケート

TOEIC バックグラウンドアンケートは、TOEIC 受験者の学歴、職歴、英語の使用と学習、そして TOEIC 受験歴に関する情報を収集するための調査です。

TOEIC バックグラウンドアンケートは、TOEIC 開始前に各個人に対して実施されます。アンケートは、カナダ、中国、フランス、インドネシア、イタリア、マレーシア、メキシコ、スイス、台湾、タイ、そして米国で実施されています。

スペイン、イギリス、日本、韓国では、各国運営機関（レップ）のニーズに合わせて類似アンケートが開発、実施されています。その他の国（アルゼンチン、ベネズエラ、香港等）で収集される人口統計学的情報は限定的なものになっています。

1997 年と 1998 年には 150,538 名の受験者が TOEIC バックグラウンドアンケートに、1,242,350 名の受験者が他の類似アンケートに回答しました。

これらのアンケート情報は一つのデータセットとして統合され、本報告書の作成に使用されました。国によって使用されたアンケートの種類が異なることから、その相違点を調整するためにデータを極めて広範囲なカテゴリーで集計する必要がありました。

さらに、本報告書における受験者の大多数は日本および韓国の受験者であり、したがって他の地域を代表するとはいいがたいという実情があります。本データに基づいて推論をたてる場合には、この点に留意する必要があります。しかしながら、ここに示す結果は 1997-98 年の TOEIC 受験者に関する一般的な情報であり、地域間の相互比較も可能です。

注：バックグラウンド情報は、日本と韓国で実施される、公開テストの際には収集されません。これらの TOEIC 受験者を含めると、1997-98 年の全世界の TOEIC 総受験者数は 2,868,573 名になります。

1997-98 年の TOEIC 受験者に関する解説

バックグラウンド情報は 1,392,888 名の TOEIC 受験者から収集されました。これは、全世界の TOEIC 総受験者数の約 99% に相当します¹。以下に、この分析の対象となった受験者に関する一般情報をまとめました。

- ・年齢：過半数（51%）が 25 才から 34 才
- ・就業状況：93% が就業者
- ・性別：77% が男性
- ・学歴：大多数（82%）が少なくとも大卒、または大卒資格取得のために在学中
- ・業種：金属製造業が最多数の 22%
- ・職種：科学／技術系専門職 48%、労働者（販売、機械操作、組立て工、非熟練工）12%、一般技術系専門職／准専門職 11%
- ・役職：68% が非管理職
- ・TOEIC 受験歴：70% が過去に 2 回以上受験
- ・英語の使用頻度：29% が週に 1 回以上使用
- ・英語圏の国での滞在期間：9% が 6 ヶ月以上滞在

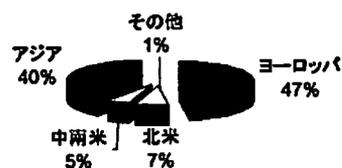
地域別受験者の割合

日本と韓国が世界全体の受験者の92%を占めています。この2カ国以外では、ヨーロッパが最も受験者が多く、次に他のアジア諸国、それから北米が続きます。全体としては、サンプルの95%がアジアにおける受験者です。

地域別受験者の割合



地域別受験者の割合(日本と韓国以外)



したがって、本報告書は世界中から収集したデータを示しているとはいえ、そこから導き出される全体的な結論は、大きな割合を占める日本と韓国の受験者データに大きく影響されており、他の地域受験者の結果とは著しく異なる事例もあります。こうした差異が認められる場合には、日本および韓国のデータを別枠とした分析を示しました。

受験者属性

| | | 人数 | % | Listening | Reading | Total |
|------|------------|-----------|------|-----------|-----------|-----------|
| 年齢 | 25才未満 | 393,365 | 29.4 | 249 (94) | 205 (96) | 454 (181) |
| | 25 - 35才 | 689,002 | 51.4 | 258 (92) | 228 (98) | 485 (181) |
| | 35 - 45才 | 204,884 | 15.3 | 248 (96) | 223 (104) | 471 (192) |
| | 45才を超える | 52,324 | 3.9 | 241 (104) | 217 (111) | 458 (207) |
| 学歴 | 高校卒業 | 61,631 | 12.5 | 181 (93) | 132 (87) | 313 (172) |
| | 職業(専門)学校卒 | 57,925 | 11.7 | 208 (98) | 166 (98) | 374 (189) |
| | 大学卒業 | 301,430 | 61.1 | 274 (88) | 257 (88) | 531 (166) |
| | 大学院卒業 | 72,624 | 14.7 | 321 (93) | 315 (82) | 636 (164) |
| 性別 | 男性 | 1,040,256 | 77.4 | 247 (91) | 220 (99) | 467 (182) |
| | 女性 | 303,615 | 22.6 | 274 (98) | 221 (99) | 495 (189) |
| 職階 | 非管理職 | 576,588 | 68.0 | 244 (91) | 211 (97) | 455 (180) |
| | 管理職/監督職 | 270,703 | 32.0 | 259 (94) | 241 (100) | 499 (185) |
| 就業状況 | 就業者 | 1,247,616 | 92.9 | 246 (90) | 213 (98) | 458 (179) |
| | 学生 | 72,474 | 5.4 | 311 (97) | 275 (96) | 586 (183) |
| | その他 | 22,557 | 1.7 | 298 (97) | 261 (94) | 560 (181) |
| 職種 | 管理職 | 33,569 | 5.0 | 269 (100) | 253 (105) | 523 (196) |
| | 科学/技術関係 | 321,927 | 48.2 | 248 (83) | 221 (92) | 469 (167) |
| | マーケティング/販売 | 58,702 | 8.8 | 253 (104) | 230 (112) | 483 (208) |
| | 財務 | 31,192 | 4.7 | 245 (100) | 228 (109) | 474 (201) |
| | 教師/研修 | 1,356 | 0.2 | 317 (111) | 278 (108) | 595 (212) |
| | 法務/経済等専門職 | 14,383 | 2.2 | 272 (101) | 250 (107) | 522 (199) |
| | カスタマーサービス | 6,889 | 1.0 | 294 (97) | 229 (89) | 524 (176) |
| | 一般技術系専門職 | 71,281 | 10.7 | 225 (91) | 201 (101) | 426 (183) |
| | 事務職 | 51,763 | 7.7 | 249 (91) | 228 (98) | 477 (180) |
| | ワーカー/(職工) | 77,232 | 11.6 | 215 (88) | 181 (97) | 396 (177) |
| 在職期間 | 2年未満 | 222,417 | 22.7 | 255 (94) | 230 (99) | 485 (184) |
| | 2 - 5年 | 239,999 | 24.5 | 253 (89) | 223 (95) | 476 (175) |
| | 5 - 10年 | 285,990 | 29.2 | 243 (89) | 210 (97) | 453 (178) |
| | 10年以上 | 231,169 | 23.6 | 235 (94) | 206 (104) | 441 (190) |

注：() 内の数字は標準偏差を表しています。

国別 TOEIC 平均スコア

下の表は、それぞれの国を母国とする（国籍を有する）全受験者の人数と平均スコアを示したものです。受験者の母国は、受験者が TOEIC を受験した国と同一とは限りません。TOEIC 平均スコアについて信頼できる情報を提供するために、受験者数が 500 名を超える国だけを表示しました。受験者の中でこれ以外の国を母国とする人若しくは母国を記載しなかった人の割合はほぼ 1%です。

| 国名 | 受験者数 | 受験者の割合 | リスニング 平均スコア | リーディング 平均スコア | トータル 平均スコア |
|-------|---------|--------|----------------|-----------------|---------------|
| ブラジル | 2,121 | 0.2 | 312 (121) | 258 (102) | 570 (215) |
| カナダ | 549 | 0.0 | 399 (98) | 323 (93) | 722 (183) |
| 中国 | 3,529 | 0.3 | 256 (107) | 246 (118) | 502 (217) |
| コロンビア | 1,344 | 0.1 | 289 (115) | 237 (101) | 526 (206) |
| フランス | 45,285 | 3.3 | 320 (102) | 312 (84) | 632 (179) |
| ドイツ | 615 | 0.0 | 428 (81) | 360 (83) | 788 (158) |
| イタリア | 2,337 | 0.2 | 304 (115) | 295 (104) | 599 (209) |
| 日本 | 862,509 | 62.7 | 246 (88) | 206 (93) | 451 (172) |
| 韓国 | 405,822 | 29.5 | 250 (96) | 230 (105) | 480 (192) |
| マレーシア | 1,079 | 0.1 | 363 (108) | 305 (109) | 668 (211) |
| メキシコ | 7,576 | 0.6 | 289 (115) | 243 (102) | 532 (209) |
| スペイン | 514 | 0.0 | 339 (108) | 301 (99) | 639 (198) |
| スイス | 3,412 | 0.2 | 348 (112) | 292 (102) | 640 (208) |
| 台湾 | 11,462 | 0.8 | 257 (100) | 218 (102) | 475 (192) |
| タイ | 27,330 | 2.0 | 272 (96) | 215 (88) | 487 (175) |
| ベネズエラ | 638 | 0.0 | 299 (120) | 257 (97) | 556 (209) |

総数=1,376,122

注：() 内の数字は標準偏差*を表しています。

*標準偏差はデータの分布度合いを表わします。データが正規分布している場合、平均点±標準偏差の間に全体の約 68%のデータが含まれます。上記の表の例で言えば、標準偏差の値が大きければそれだけ受験者のスコアが広い範囲に散らばっており、逆に小さければ平均点付近に多くの受験者が集中していることを示します。

TOEIC テストの各国データを比較する際は、以下の点にご留意下さい。

- TOEIC の受験には、(1)「公開テスト」と、(2)「IP (団体特別受験制度)」の 2 種類があります。(1) は TOEIC 運営委員会の管理下で、年 7 回実施し、個人が直接申し込みをして受験します。(2) は企業・大学等の団体が、内部の者を対象に実施します。日本と韓国以外の国では、ほとんどが(2)のみの実施であるため、データの条件をそろえるため、Worldwide Data 1997-1998 の数値は、(2)についてまとめています。これを見ると日本人の平均点はかなり低くなっていますが、(1)の「公開テスト」の平均点をご覧いただくと、数値が上がります（このホームページ「TOEIC データ集」内の「平均点」をご参照ください）。
個人が自主的に受験する場合と団体などから強制されて受験する場合には、モチベーション等に大きな相違があると予想され、それが平均点に如実に反映されているものと思われます。
- (2)の IP については、受験者数に関して日本と他の国との間に圧倒的な開きがあり、また公開テストの平均点を考慮に入れると、上記データを比較して、「日本人の英語力が低いと言い切る事はできない」という見解をもっております。
(1)「公開テスト」、(2)「IP」の平均点を合わせてご参照いただければ幸いです。

尚、このデータのご引用をお考えの際は、事前に財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会までご連絡下さいますようお願い申し上げます。また、その他ご不明な点がある場合もご連絡下さいますようお願い申し上げます。

フォーラム 2002：英語力を問う 資料集

発行年月日 平成 14 年 2 月 10 日

発 行 者 英米文化学会

発行責任者 高 取 清

発 行 所 英米文化学会

〒101-8310 千代田区神田駿河台 1-8-13

日本大学歯学部 3 号館 佐藤治夫英語研究室内